

日光道東遺跡

団体営日光道東地区土地改良総合整備事業
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I

序 文

勢多郡大胡町は、大胡藩2万石の城主牧野康成・忠成公の二代にわたる城下町であります。元和二年(1616)、牧野氏が越後長嶺に転封になり、その後前橋藩酒井氏の所領として城代が置かれました。

貞享元年(1684)にかかれた「前橋風土記」には城下の様子が『大胡宿、本町、古城の東に在り。道南北に通す。北は上宿と名づけ、南を下宿と曰う。市有り、三八の日を期となす。群商ここに聚る。～』と記されています。大胡宿は、日光裏街道、伊勢崎、五料道、沼田街道等が交わり商業取引の地として賑わったであろうと思われます。

発掘調査地点である字日光道東は、大胡宿より宮城・粕川・新里を経て足尾に通じる日光裏街道に接する場所であり、桑畠と水田が営まれている農業地域であります。

団体営日光道東地区土地改良総合事業は農業経営者の皆さんから要望され、平成4年より事業開始となり、それに伴い同年より開始された埋蔵文化財発掘調査は「日光道東遺跡」、平成5年度の「浅見遺跡」であります。

今回発刊の報告書は、平成4年度に行われた日光道東遺跡発掘調査に基づくもので、旧石器時代～中世の墓地に至る複合遺跡の検出結果であります。

末筆ではありますが、調査にご協力して頂いた方々、ご指導を頂いた方々に心より感謝申し上げ序文にかえさせていただきます。

平成6年3月

大胡町教育委員会

教育長 魁持 平三郎

例　　言

- 1、本書は、平成4年度群馬県勢多郡大胡町河原浜地内に於ける団体宮日光道東地区土地改良総合整備事業に係る「日光道東遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2、「日光道東遺跡」は群馬県勢多郡大胡町字日光道東1296番地外に所在する。
- 3、発掘調査は、平成5年1月～同年3月まで行った。
- 4、発掘調査費用及び整理事業は、総額の内72%を農政部局、残り28%を文化財補助事業として対応した。
- 5、発掘調査及び整理事業は、大胡町教育委員会が直當で実施し、山下歳信が担当した。
調査組織は、次のとおりである。

事務局

教育長	郷持平三郎
社会教育課長	井上敬雄
課長補佐	角間宏
調査担当	山下歳信
主事	藤坂和延

- 6、本書の作成組織は、次のとおりである。

事務局

教育長	郷持平三郎
社会教育課長	井上敬雄
課長補佐	角間宏
文化財担当	山下歳信
主事	藤坂和延
主事補	小沼安美

- 7、本書の作成は、編集、執筆を山下が担当した。旧石器遺物は小管将夫氏に寄稿していただいた。
石材、人骨鑑定はパリノ・サーヴェイ、地質は古環境研究所に依頼した。
- 8、発掘調査において出土した遺物については全て大胡町教育委員会で保管している。
- 9、発掘調査、整理に当たっては、下記の方々並びに関係機関のご協力、ご教示を頂いた。記して感謝いたします。(順不同、敬称略)
群馬県教育委員会文化財保護課、大胡町土地改良課、勢多郡社会教育文化財分会の諸氏、
(株)測研、技研測量設計(株)、須賀建設(株)、綿貫邦男、谷藤保彌、小管将夫
- 10、発掘参加者並びに整理参加者(敬称略)
阿久沢福造 阿久沢長平 井野ちう子 井上美代子 石井よね 奥野富子 大原きみ子 小沢チヅエ
大野京子 喜楽トヨ 木村瑞枝 木村かね子 小沼はづ 下山敏 菅田ツル 滝本房子 高橋充子
角田英夫 勒使川原幸枝 登坂うた子 萩原秀子 林みき 松倉菊江 五十嵐文江
閔谷清治 山下雅江 横沢和代 横沢恵子

凡 例

- 1、遺構の略号はつぎのとおりである。
H 穴住居跡 S B 掘立柱建物跡 JD 繩文時代土坑 M 溝状遺構
- 2、搜査図版の縮尺はつぎのとおりである。
全体図—1/600 住居跡—1/60 カマド—1/30 掘立柱建物跡—1/60
土壤—1/40 溝平面図—1/300
石器—1/3~2/3 土器—1/3 古錢—2/3
- 3、遺構挿図中に記した基準線は、標高で表した。
- 4、遺構挿図中に示したN方向は、座標北である。
- 5、本文中の第1図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「前橋」を使用した。
※ 紙面の都合上、遺物写真的掲載ができなかった。

目 次

序文
例言
凡例
本文

第1章 発掘に至る経緯と概要	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の方法と概要	1
第3節 日光道東遺跡と周辺の遺跡	1
第2章 調査の記録	6
第1節 旧石器時代	6
第2節 繩文時代	9
第3節 平安時代	19
第4節 中近世	57
第3章 調査の成果と今後の課題	64
写真図版	

挿 図 目 次

第1図	日光道東遺跡の位置図	2	第2図	日光道東遺跡全体図	3
第3図	日光道東遺跡と周辺の遺跡	5	第4図	土層柱状図	6
第5図	旧石器出土状況	7	第6図	旧石器出土遺物	8
第7図	落し穴（1）	10	第8図	落し穴（2）	11
第9図	落し穴（3）	12	第10図	土壙	13
第11図	縄文土器（1）	15	第12図	縄文土器（2）	17
第13図	縄文時代石器（1）	18	第14図	縄文時代石器（2）	18
第15図	1号住居跡・出土遺物	19	第16図	2号住居跡・出土遺物	20
第17図	3号住居跡・出土遺物	22	第18図	4号住居跡・出土遺物	23
第19図	5号住居跡・出土遺物	24	第20図	6号住居跡・出土遺物	25
第21図	7号住居跡・出土遺物	27	第22図	8号住居跡	29
第23図	8号住居跡出土遺物	30	第24図	9号住居跡・出土遺物	32
第25図	10号住居跡炉址	33	第26図	11号住居跡・出土遺物	34
第27図	12号住居跡	36	第28図	12号住居跡出土遺物	37
第29図	13号住居跡・出土遺物	39	第30図	14号住居跡	40
第31図	14号住居跡出土遺物	41	第32図	15号住居跡・出土遺物	43
第33図	16号住居跡・出土遺物	45	第34図	17号住居跡	46
第35図	17号住居跡出土遺物	47	第36図	18号住居跡・出土遺物	49
第37図	19、20号住居跡	50	第38図	21号住居跡・出土遺物	51
第39図	22号住居跡	51	第40図	1号掘立柱建物跡	52
第41図	2、3号掘立柱建物跡	53	第42図	井戸状土壙	54
第43図	遺構外出土遺物	55	第44図	地割れ、断層平面図	56
第45図	中世古墓全体図	58	第46図	中世古墓平面図	59
第47図	古墓出土遺物（1）	61	第48図	古錢	62
第49図	茂木古墓	63	第50図	1、2号溝	65
第51図	3号溝	66			

写 真 図 版

P L 1 遺跡全景（南東より）

P L 2 1 2号住居跡(東より) 2 2号住居跡(南より) 3 2号住居跡遺物出土状況

4 3号住居跡(南より)

P L 3 1 3号住居跡カマドセクション(南西より) 2 4号住居跡(北より)

3 4号住居跡セクション(南西より)

P L 4 1 4号住居跡カマドセクション(西より) 2 4号住居跡遺物出土状況

3 5号住居跡(北西より)

P L 5 1 5号住居跡カマドセクション(南西より) 2 5号住居跡カマド(西より)

- 3 6号住居跡(北西より)
P L 6 1 6号住居跡セクション(南より) 2 7号住居跡(北西より)
3 7号住居跡セクション(南西より)
- P L 7 1 8号住居跡(北西より) 2 8号住居跡セクション(南西より) 3 9号住居跡(西より)
- P L 8 1 9号住居跡セクション(南より) 2 9号住居跡遺物出土状況
3 9号住居跡遺物出土状況
- P L 9 1 9号住居跡カマド(西より) 2 11、12号住居跡(西より)
3 11、12号住居跡セクション(南西より)
- P L 10 1 11号住居跡(南西より) 2 11号住居跡カマドセクション(南西より)
3 11号住居跡カマド(西より)
- P L 11 1 12号住居跡(南西より) 2 13号住居跡(北西より)
3 13号住居跡カマドセクション(南西より)
- P L 12 1 13号住居跡カマド(北西より) 2 13号住居跡遺物出土状況
3 14号住居跡(北西より)
- P L 13 1 14号住居跡セクション(北西より) 2 14号住居跡遺物出土状況(北西より)
3 14号住居跡カマドセクション(南西より)
- P L 14 1 14号住居跡カマド(北西より) 2 14号住居跡カマド(北西より)
3 14号住居跡遺物出土状況
- P L 15 1 15号住居跡セクション(南西より) 2 15号住居跡カマド(北西より)
3 16号住居跡(北西より)
- P L 16 1 16号住居跡セクション(南西より) 2 17号住居跡(北西より)
3 17号住居跡(北西より)
- P L 17 1 17号住居跡セクション 2 18号住居跡(南東より)
3 18号住居跡セクション(南より)
- P L 18 1 19、20号住居跡(南西より) 2 19、20号住居跡セクション(南西より)
3 21号住居跡(南西より)
- P L 19 1 21号住居跡(南より) 2 1、2号掘立柱建物跡 3 3号掘立柱建物跡

通 国 真 事

第1章 発掘調査に至る経緯と概要

第1節 発掘調査に至る経緯

団体営「日光道東地区土地改良総合事業」は、大胡町大字河原浜地内の東部に位置する字日光道東・浅見と大字樋越地内の西部、天王山地区が該当地区である。東は能満寺川、西は県道上神梅・大胡線、南は上毛電気鉄道、北は勢多郡宮城村に挟まれた区域である。

該当地内に於ける埋蔵文化財の発掘調査は皆無であるが、大胡町誌によると旧石器時代では字一本松で搔器・削器など出土を記している。縄文時代では当調査地区などに前期～中期の散布がある。弥生時代は散布地が見られず、古墳の分布は少なく、現在まで3基の円墳を確認しているだけである。土師器の散布は当調査地区等を記している。

当教育委員会は、上記の遺跡分布より平成4年度事業対象地域である字日光道東地区に試掘調査を行ない、縄文時代～平安時代の遺構並びに遺物を検出。試掘結果に基づき土地改良課との協議で日光道東地区的台地が全面切土され、前面低地への盛土として移動する事から、台地部の記録保存を目的とする発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査の方法と概要

本遺跡は試掘調査に基づき、調査区域を台地の全面と東低地とした。表土は掘削用重機で除去。調査の実施にあたっては、調査区全体に国家座標に基づいた10mのグリッドを設定し、南西隅を基点としてX軸の北方向にアルファベット、Y軸の東方向に算用数字を用い、南西隅の座標でグリッド名を呼称。

発掘調査で検出された遺構は、大きく旧石器時代、縄文時代、平安時代、中近世の4期に分かれる。

旧石器時代

縄文時代 落し穴、土壙

平安時代 穴立住居22軒、掘立柱建物跡3軒、井戸状土壙1基、地割れ・断層

中近世 古墓、溝状遺構

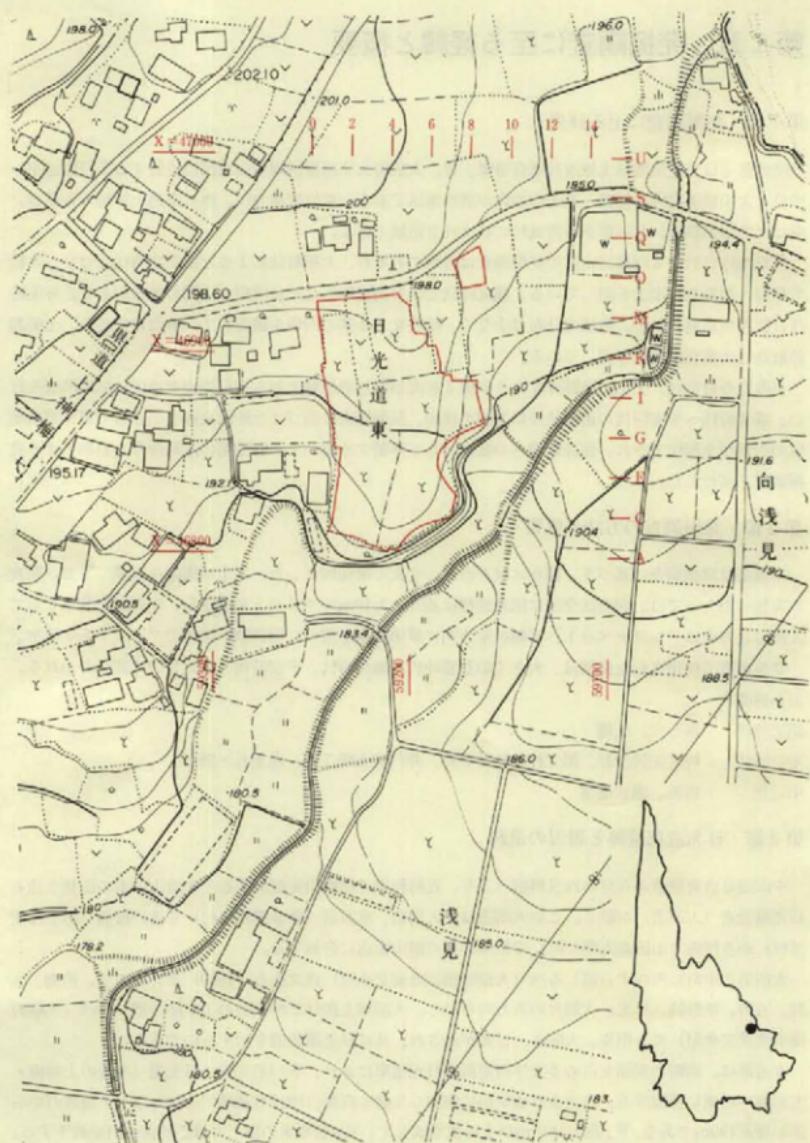
第3節 日光道東遺跡と周辺の遺跡

中山道は倉賀野宿から分かれ五料宿へ入り、五料河岸で利根川を渡河すると赤城山の東の山麓を巡る日光裏街道（大胡道）が続く。この大胡道は、大胡宿、室沢宿（勢多郡柏川村）を抜け板橋（勢多郡新里村）から神梅（山田郡大間々町）で足尾からの鰐山街道に合流する。

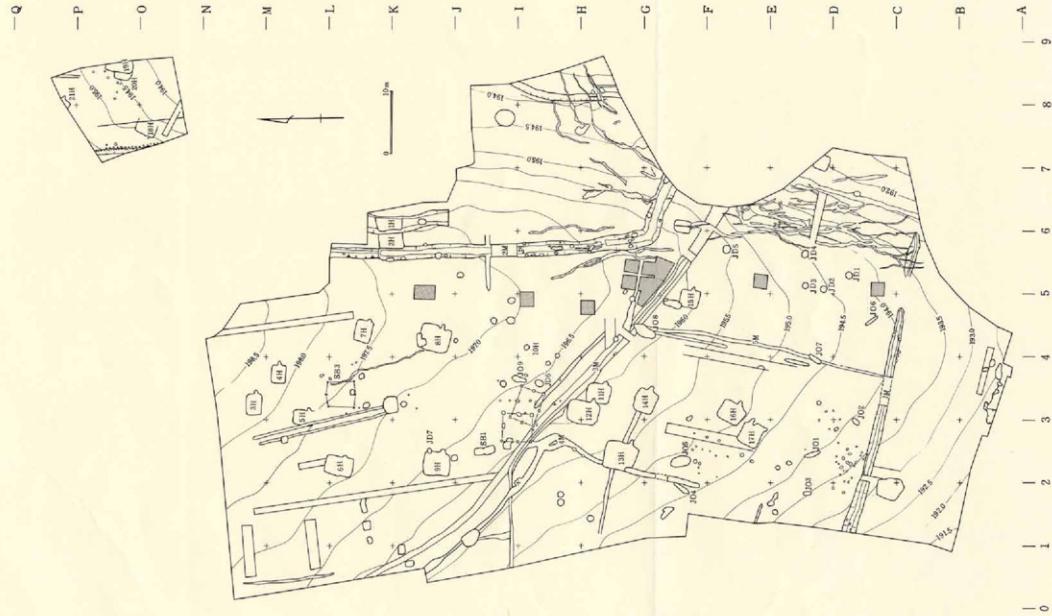
大胡宿の中町に所在する道しるべ（大胡町指定重要文化財）は文化六（1809）年のもので、前橋・米野・五料・伊勢崎・日光・大間々の六方向を示し、大胡宿を抜けて河原浜の丁字路の道しるべ（大胡町指定重要文化財）にも相生、大間々、日光が示され、共に日光裏街道を示すものである。

本遺跡は、当町の東部を占める大字河原浜字日光道東にあり、字が示す様に日光道（現在の上神梅・大胡線）の東に位置する。北方より緩やかに傾斜して続く高燥台地は当遺跡で舌状となり、遺跡の中心部が標高190mである。東、南は10m以上の崖を成している。台地東の崖下には西能満寺川が流下する。

当町は群馬県指定史跡「大胡城」（12）の城下町であり、中心的街区が大胡宿である。大胡城は荒砥川



第1図 日光道東遺跡の位置図



第2図 日光道東遺跡全体図

右岸の台地上に築城された半山城で、戦国時代～江戸時代初期の形態を留め、徳川家康の重臣牧野康成、忠成公の二代が在城した。

旧石器時代では三ツ屋遺跡(7)が著名である。近年の発掘調査で僅かであるが資料の増加が見られる。縄文時代では上大屋・樋越地区遺跡群(2)で前期諸紀式期、上ノ山遺跡(6)で中期加曾利E式期、天神遺跡(10)で中期阿玉台～後期堀之内式期、西一丁田遺跡(15)で堀之内～加曾利B式期などの調査が行われている。

弥生時代は、今まで大胡金丸遺跡の存在が確認されているだけである。古墳時代では大胡臣に係る群馬県指定史跡「堀越古墳」(11)が存在する。近年、上ノ山古墳群(6)の調査で5世紀末～6世紀初頭の竪穴式古墳等が検出された。横沢地区の柴崎古墳群(14)からは獣頭環頭大刀が出土している。集落跡では前橋東商業遺跡(4)、新畑遺跡(13)で石田川式期、下宮闇遺跡(5)で和泉式期、天神風呂遺跡(9)では鬼高式期を検出している。

奈良～平安時代では天神風呂遺跡(9)の周囲に大集落が展開し、施寺に係る資料の増加が注目される。生産址遺跡としては八ヶ峰遺跡(2)で須恵器窯・木撲窯・製鉄址、乙西尾引遺跡(16)でも製鉄址・木炭窯などが検出されている。中宮闇遺跡(3)では弘仁9年の地震災害に起因する泥流で埋没した水田址を検出している。



第3図 日光道東遺跡と周辺の遺跡

第2章 調査の記録

第1節 旧石器時代

1. はじめに

当遺跡の発掘調査において、3号溝（F 5グリット）の掘り下げ作業中に覆土内より第6図6の旧石器が検出された。そこで、台地の鞍部に2×2m前後のテストピットを設定し、As-BPまで掘り下げ、その追究を計った。そして、G 5グリットポイント周辺の設定区より剝片と礫を検出した。そのため、石器の出土層位を確認する目的で古環境研究所に野外地質調査を依頼して土層断面を観察して示標テフラ層の層位等を観察した。

2. 地質層序と石器の出土層位

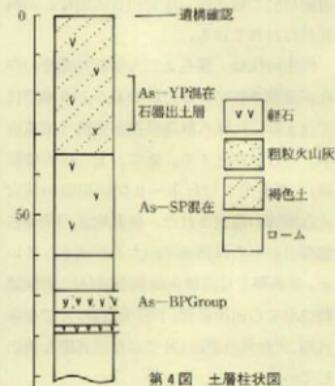
当遺跡の台地部分は、表土の直下よりローム層へ移行している。野外調査では、石器の出土したG 5グリットの土層層序を観察し、柱状図に示した(第4図)。遺跡では下位よりローム層(層厚12cm)、黄色軽石層(層厚2cm)、軽石の最大径:3mm)、暗灰色土(層厚3cm)、灰色粗粒火山灰混じり橙色軽石層(層厚5cm、軽石の最大径:4mm)、ローム層(層厚9cm)、よく発泡した白色軽石に富むローム層(層厚35cm、軽石の最大径:3mm)の連続が認められる。石器は、この土層のうち最上位の褐色土の下部から検出された。

2層の軽石層は、その層相から約1.6~2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻褐色軽石群(As-BPGroup、新井、1962、町田ほか、1984)に同定される。またその上位のローム層中に多く認められる白色軽石はその層位と岩相から約1.5万年前に浅間火山から噴出した浅間一白糸軽石(As-SP、町田ほか、1984)に由来するものと考えられる。さらに最上位の褐色土に認められる黄色軽石はその層位と層相から約1.3~1.4万年前に噴出した浅間一板鼻黄色軽石(As-YP、新井、1962、町田ほか、1984)に由来するものと考えられる。以上のことから石器が出土した層位はAs-SPの軽石が濃集したローム層の上位、As-YPに由来する軽石が混じった軽石土の下部にあると考えられる。

3.まとめ

当遺跡において野外地質調査をおこなった結果、下位より浅間一板鼻褐色軽石群(As-BP)の2層、浅間一白糸軽石(As-SP)さらに浅間一板鼻黄色軽石(As-YP)の4層のテフラおよびテフラの濃集層が検出された。

石器は、As-SPの軽石が混じったローム層の上位から検出されていることから、その層位はAs-SPより上位にあると推定される。As-SPとの厳密な層位関係は不明である。



第4図 土層柱状図

<文献>

新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年、群馬大学紀要自然科学編

町田 洋、新井房夫、小田静夫、遠藤邦彦、杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—古文化財編集委員会「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」

4. 旧石器の遺構と出土遺物 (第5、6図)

縛は、A調査区のほぼ中央で台地鞍部の平坦地に位置するF、G5グリットにまたがって分布している。

検出された5点の縛は、長軸長2.8m以上、短軸長2mの楕円形内に散在的な分布状況で検出された。出土層位は、As-YP混在層で、20cm前後の高低差を測る。使用痕は見いだせない。石材は、全てが輝石安山岩で、焼成を受けて赤色化している部分が見られる。重量は、2.7~8kgを測る。

本遺跡から旧石器時代の石器と考えられるものが6点 (第6図1~6) が出土しているが、本米の包含層であるローム層中から出土した1以外の資料は、原位置を留めないものである。

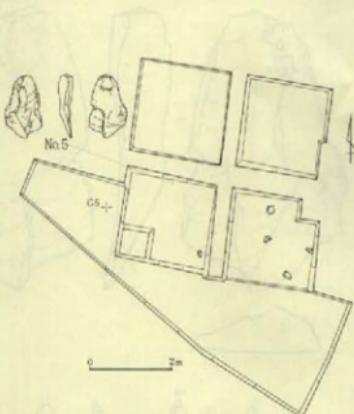
1 G5グリットのAs-YP混在層から出土した縦長の剥片である。打面調整が施され、正面には主要剝離面と同方向からの剝離痕が2面みられることなどから、同様な剥片を連続して剝離していると考えられる。また正面上部左側面には棟上からの調整痕が施されている。以上のことから、形状的には不整形であるが、石刃技法の所産であると考えられるであろう。灰褐色に風化した黒色頁岩製であり、重量は24.0gを計る。

2 G6グリットから出土した円錐形 (野岳・休場タイプと考えられる) の細石核である。右側面及び裏面は広く自然面に覆われているので、直径約3cm程の縛を素材としていると考えられる。細石刃の剝離作業は正面及び左側面からなされており、打面の作出や再生作業もこれらの面から打面に向かってなされている。やや黒みのある透明な黒耀石を用いており、重量は5.0gを計る。

3 G5グリットから出土した柳葉形のナイフ形石器である。素材は、両設打面石核から剝離された石刃を用いている。調整剝離は、右先端及び基部に急角度に施され、また基部の裏面にも基端から平坦な調整がなされている。右側縁の調整は先端から基部へ連続してはみられないものの、二側縁加工のナイフ形石器に属するものであろう。灰色に風化した黒色頁岩製で、重量は3.0gを計る。

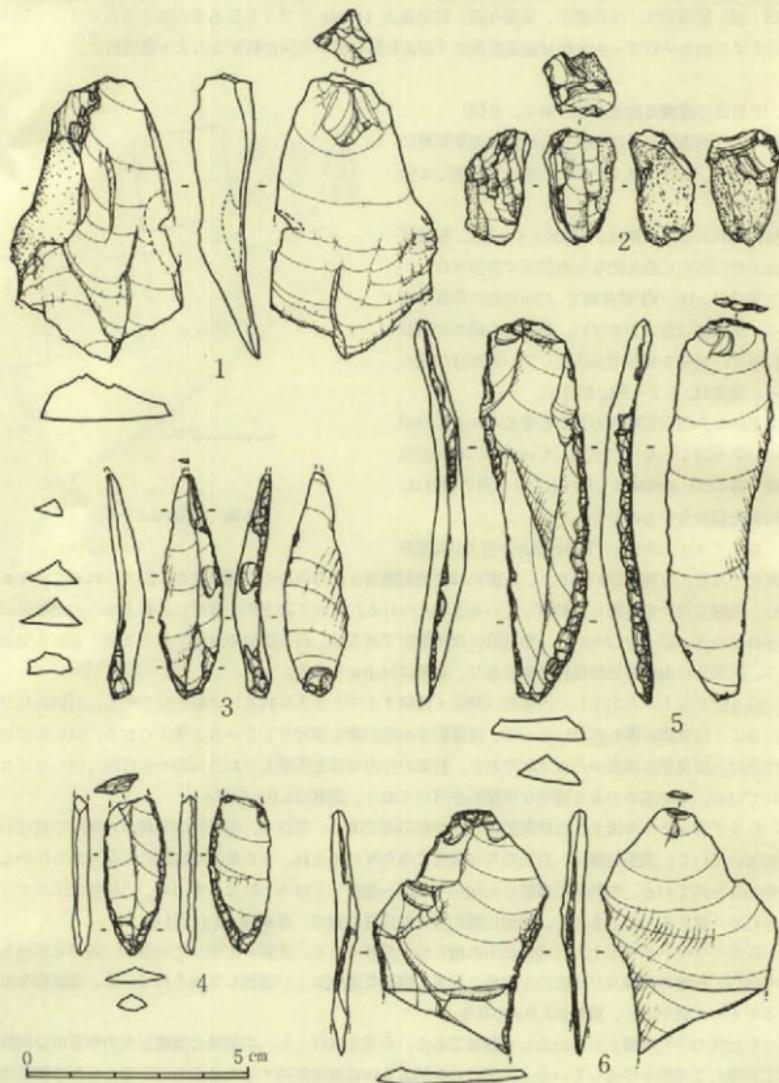
4 G5グリットから出土した周縁加工の槍先形尖頭器である。先端が欠損しているが、石刃を素材として用い、正面の周縁及び裏面の左側縁と基部に微細な調整加工が連続して施されている。黒緑色を呈するチャート製であり、重量は2.0gを計る。

5 中近世の3号溝覆土から出土した削器である。石刃を素材とし、右側縁に連続したやや平坦な調整加工を施して刃部を作出している。上部には着柄あるいは直接保持するためのものと考えられる調整加工が施されている。チョコレート色を呈する珪質頁岩製であり、重量は11.8gを計る。



第5図 旧石器出土平面図

6 3号溝覆土から出土した2点の破片が接合した削器である。薄い紙長剣片を用い、微細な調整加工を施して両側縁に刃部を作出している。茶褐色を呈する珪質頁岩製であり、重量は7.1gを計る。



第6図 旧石器出土遺物

第2節 繩文時代

縩文時代の遺構と遺物

当遺跡で縩文時代に該当する遺構は、9基の落し穴と7基の土壙を検出した。落し穴は本調査区の中央から南方に検出され、土壙は南東部に4基が集中していた。

1号落し穴（第7図） 本調査区の南西C 2グリットで検出。平面形は長楕円形を呈し、短軸の断面形は薬研状とし、長軸の両端を袋状とする。底面は幅15cm前後と狭い。3カ所にピットを設けている。規模は長軸長2.68m、短軸長70cm、深さ1m前後を測る。長軸方向はN19°Wである。出土遺物は無い。

2号落し穴（第7図） 本調査区の南西C 2～3グリットにまたがって検出。平面形は西辺の一部が突出する楕円形を呈し、平坦な底面よりほぼ垂直な壁面で立ち上がり中位でやや開口する。規模は長軸長1.34m、短軸最大幅80cm、深さ1.15mを測る。長軸方向はN45°Eである。底面に施設は見られない。出土遺物は無い。

3号落し穴（第7図） 本調査区の南西C 1グリットで検出。平面形は楕円形を呈し、短軸の断面形はU字状とする。規模は長軸長1.45m、短軸最大幅83cm、深さ80cm前後を測る。長軸方向はN6°Wである。底面に施設は見られない。出土遺物は無い。

4号落し穴（第7図） 本調査区の南西寄りF 1グリットで検出。平面形は南方部に凹みが見られる長楕円形を呈し、1号落し穴と同様の掘り込みである。規模は長軸長2.86m、短軸最大幅85cm、深さ1.1m前後を測る。長軸方向はN43°Eである。底面は南方に緩やかな窪みを呈し、15cm前後の幅である。施設は検出できなかった。出土遺物は無い。

5号落し穴（第8図） 4号落し穴の東F 2グリットで検出。平面形は楕円形を呈し、短軸の断面形は薬研状で長軸の両端を袋状とする。規模は長軸長3.25m、短軸最大幅1.78m、最深部2.35mを測る。長軸方向はN14°Eである。南北の両端が底面は幅15cm前後で皿状に中央部が窪む。施設は検出できなかった。出土遺物は無い。

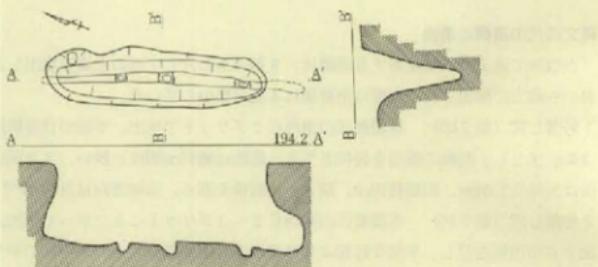
6号落し穴（第8図） 本調査区の南方C 4グリットで検出。平面形は棒状の楕円形を呈し、短軸の断面形は薬研状で長軸の両端を袋状とする。規模は長軸2.45m、短軸幅35～45cm、深さ90cm前後を測る。長軸方向はN31°Wである。底面は幅8～13cmで緩やかな起伏を呈する。施設は検出できなかった。出土遺物は無い。

7号落し穴（第8図） 本調査区の南方D 3～4グリットにまたがって検出。平面形は北西部に凹みを有する楕円形を呈し、短軸の断面形は薬研状で長軸の両端を袋状とする。規模は長軸長2.21m、短軸最大幅93cm、深さ1.2mを測る。長軸方向はN24°Eである。底面は12cm前後幅で中央部を最深部とする皿状を呈する。施設は検出できなかった。出土遺物は無い。

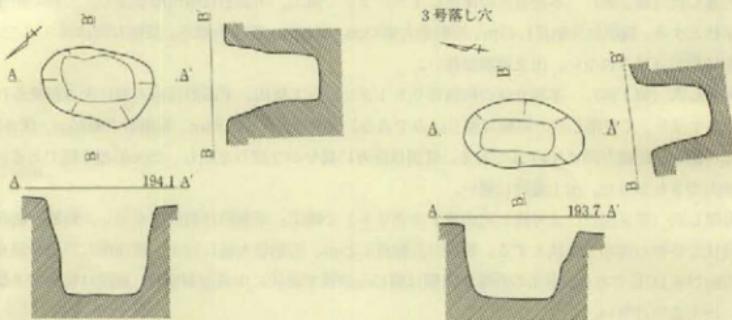
8号落し穴（第9図） 本調査区の中央やや南、F 4、G 4グリットにまたがって検出。平面形は北方部が尖り気味の細長い楕円形を呈し、短軸の断面形は薬研状で長軸の両端を袋状とする。規模は長軸長4m、短軸最大幅1.55m、深さ2.55mを測る。長軸方向はN36°Eである。底面は8～15cm幅で緩やかな起伏を呈する。施設は検出できなかった。出土遺物は無い。

9号落し穴（第9図） 本調査区の中央部H 3、I 3グリットにまたがって検出。平面形は東辺の一部がやや突出する楕円形を呈し、短軸の断面形は薬研状で長軸の両端を袋状とする。規模は長軸長2.25m、短軸最大幅98cm、深さ1.2m前後を測る。長軸方向はN9°Eである。底面は7～18cm幅で2カ所にピット

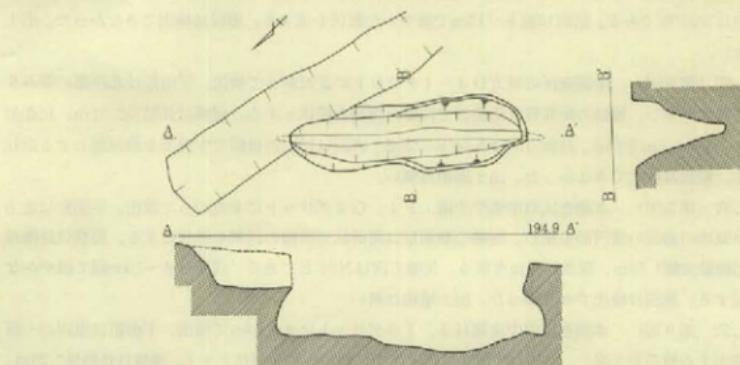
1号落し穴



2号落し穴

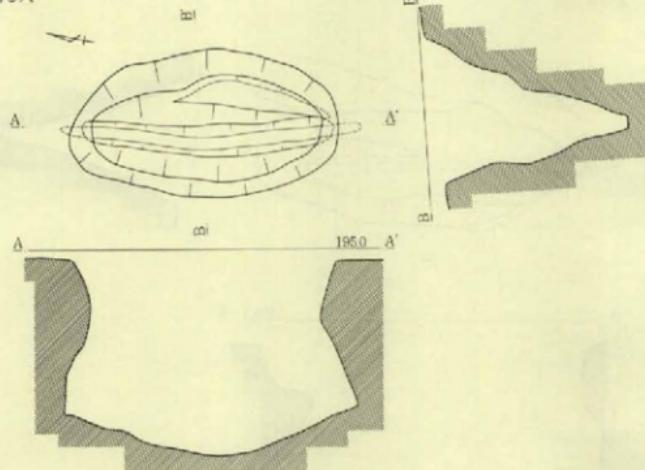


4号落し穴

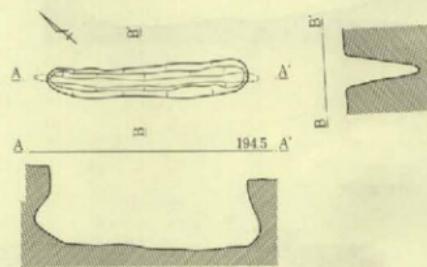


第7図 落し穴 (1)

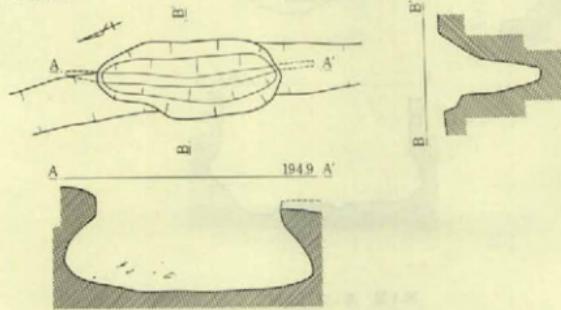
5号落し穴



6号落し穴

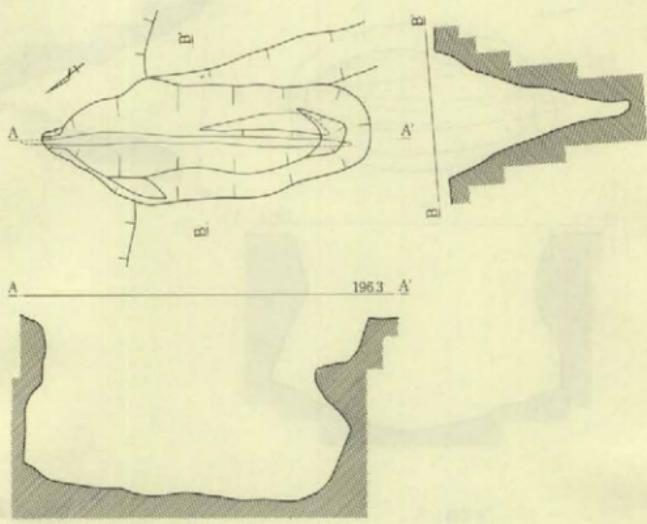


7号落し穴

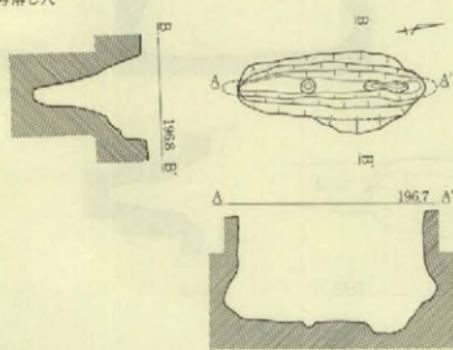


第8図 落し穴 (2)

8号落し穴



9号落し穴



第9図 落し穴(3)

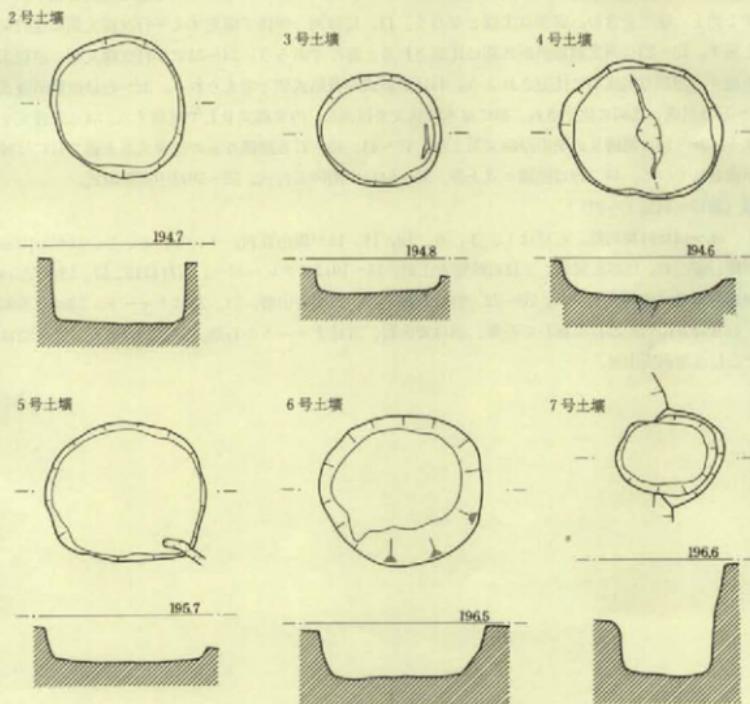
を設けている。出土遺物は無い。

1号土壙（第10図） 本調査区の南東C 5グリットで検出。平面形は円形を呈し、規模は1.10～1.15mの径で深さ20cm前後を測る。底面は中央部が窪む皿状とする。縄文前期黒浜式期に比定される土器片（第11図14、19、23）が出土

2号土壙（第10図） 1号土壙の北西に検出。平面形は円形を呈し、規模は1.06～1.15mの径で深さ50cmを測る。底面は平坦でほぼ垂直の壁面とする。

3号土壙（第10図） 2号土壙の真北D 5グリットで検出。平面形はやや東西に長い円形を呈し、東西長1m、南北長90cm、深さ15cmを測る。底面は平面である。

4号土壙（第10図） 3号土壙の東D 5グリットで検出。東西に長い梢円形を呈し、規模は長軸長1.33m、短軸長1.05m、深さ25cm前後を測る。底面は中央部を南北に通過する地割れによって多少段差を生じている。



第10図 土壙

5号土壤（第10図） 3、4号土壤の北方E 5グリットで検出。平面形は南東部を楕丸状とする楕円形を呈し、規模は東西長1.3m、南北長1.12m、深さ28cmを測る。底面はほぼ平坦である。

6号土壤（第10図） 本調査区のほぼ中央H 3グリットで検出。平面形は円形を呈し、規模は1.2~1.3mの径で深さ40cm前後を測る。底面はやや起伏を有する。

7号土壤（第10図） 9号住居跡の北東コーナー部に重複して検出。平面形は東西を長軸とする楕円形を呈し、長軸長90cm前後、短軸80cm、深さ90cmを測る。

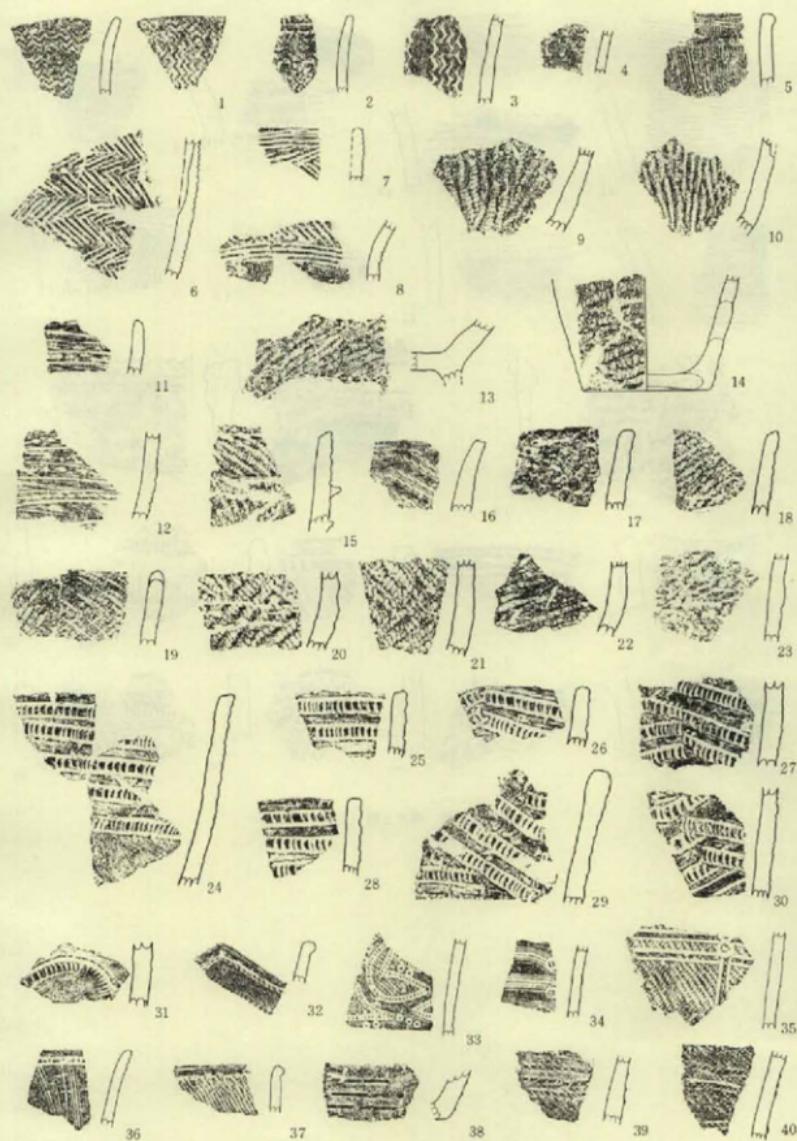
出土遺物（第11~14図）

土器（第11~12図 1~59）

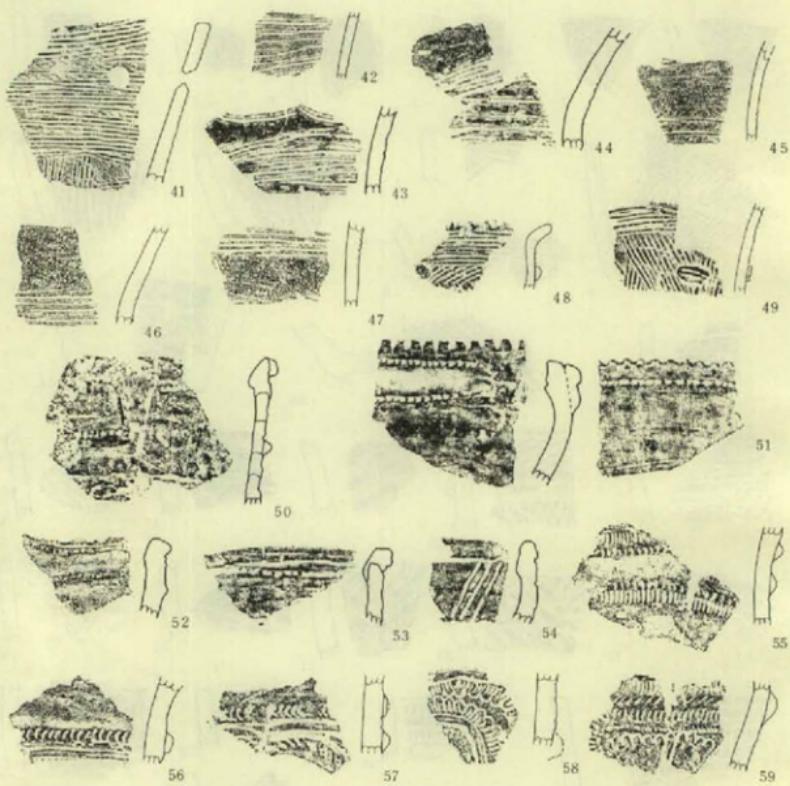
遺構に伴う土器片は2号土壤出土の14、19、23のみである。1~4は山型押形文。1と3は赤褐色の色調を呈し、堅緻である。1の口縁部片は内面を横位、外面の口唇下に横位、その下方を縦位に施す。2と4は褐色の色調を呈す。2は口唇部と口縁部下に横位、下方を縦位に施している。3の胴部片は4条1組で縦位に施す。5は撚糸系文土器。6~7は同一個体片と考えられ、胎土に変成岩を含む。4条の沈線による区画内を矢羽状に沈線文で充填する。9、10は早期末と考えられる縦走繩文を施す胸部下半片で胎土に纖維を含む。底部は尖底となろう。11、12は同一個体で横走する平行沈線文間に連続刺突文を施す。13~23は繩文前期黒浜式期に比定される土器片であろう。24~31は平行沈線文間に連続爪形文を施す。前期有尾式期に比定されよう。44は黒浜式か有尾式期と考えられる。32~49は前期諸繩式。32~36は諸繩a式期に比定され、33には木葉状文を区画し、内を繩文R Lで充填する。34は肋骨文を意匠する。38~40は諸繩b式期の浮線文系土器。41~43、45~47も諸繩b式の沈線文系土器で41には補修穴が施されている。48、49は諸繩c式土器。50~54は中期阿玉台式。55~59は中期勝坂式。

石器（第13~14図 1~32）

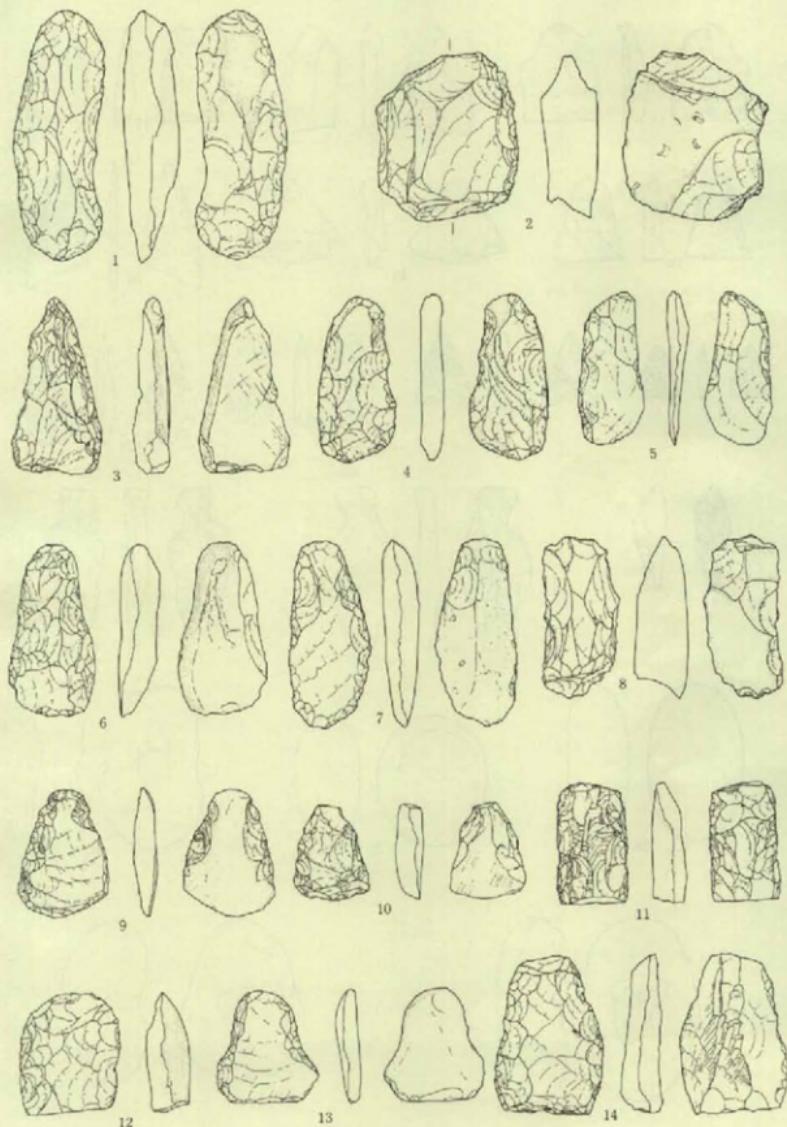
1、3~14は打製石斧。石材は1、3、6、10、11、14が黒色頁岩。4、5、8、9、13が安山岩。7が輝石安山岩。12が玄武岩。2は石核で安山岩。15~19はスクレーパー。石材は15、17、18が安山岩。16が黒色頁岩。19がチャート。20~22、24は石錐。20、22が安山岩。21、24はチャート。23は有舌尖頭器。石材は安山岩。25は黒耀石の石錐。26は安山岩、27はチャートの石匙。28、29は磨石、30~32は凹石で石材は輝石安山岩。



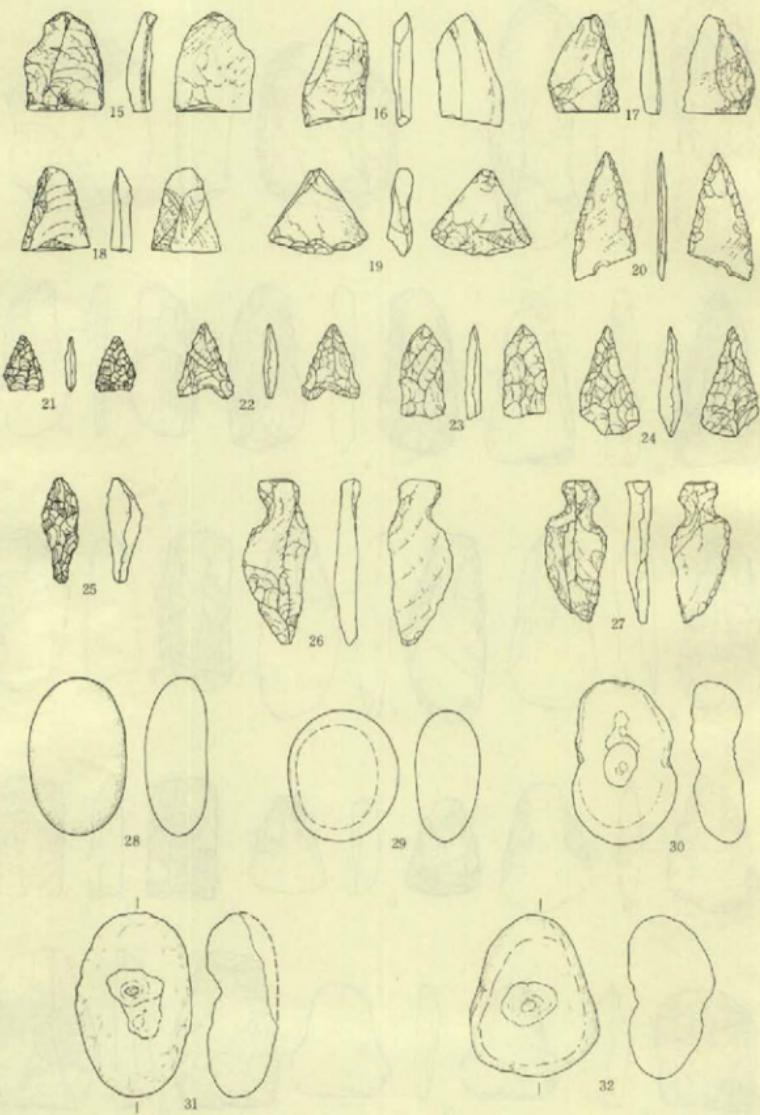
第11図 義文土器(1)



第12図 周文土器 (2)



第13図 縄文時代石器（1）



第14図 縄文時代石器（2）

第3節 平安時代 ● 積穴住居跡

1号住居跡（第15図）

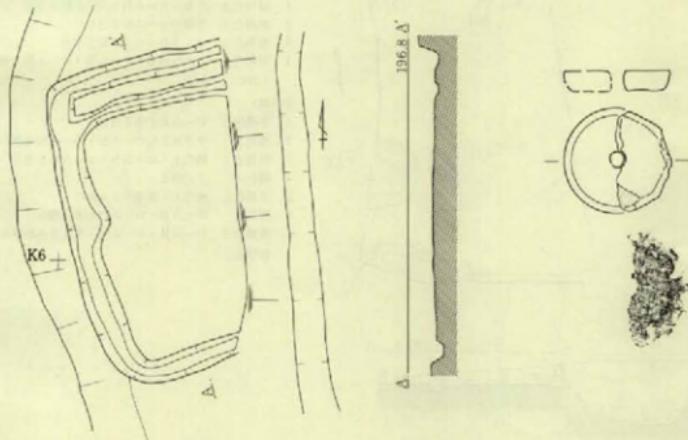
当住居跡は、A調査区中央やや北東よりの東傾斜面J、K5、6グリットにまたがって検出され、標高196.5～197m間に位置する。周辺は傾斜地を耕作に供するために地境で削平し、平坦部を作り出している。この削平により東方、2号住居跡の東辺が破壊されている。

残存する規模は、南北長3.9m、東西長最大2.25mを測る。形状は、方形を呈すると考えられる。床面は、ほぼ平坦である。周溝は、残存壁下に連続して検出され、北壁沿いには2条併走するが調査の不手際から拡張かどうか不明である。規模は、幅30～40cm、深さ3cmほどを測り、断面形はU字状を呈する。柱穴状の掘り込み、貯蔵穴、カマドは検出できなかった。

遺物は、残存する覆土より土師の細片と図示した紡錘車のみであった。

出土遺物

1 土製紡錘車 偏平な台形を呈し、復元最大径4.3cm、厚さ8mm、復元孔径5mm、残存重量6gを測る。大径面の使用擦痕はほとんど見られない。小径面と側面に布目痕が残る。褐色を呈し、多量の粗砂粒を含む。焼成は酸化焰。



第15図 1号住居跡・出土遺物

2号住居跡（第16図）

当住居跡は、A調査区中央やや北東よりのJ5、K5グリットにまたがって検出され、標高197～197.5m間に位置する。台地の鞍部から東傾斜に移行する箇所に構築されている。東辺は削平によってカマド周辺の大部分を失い、西辺は2号溝によって切られている。

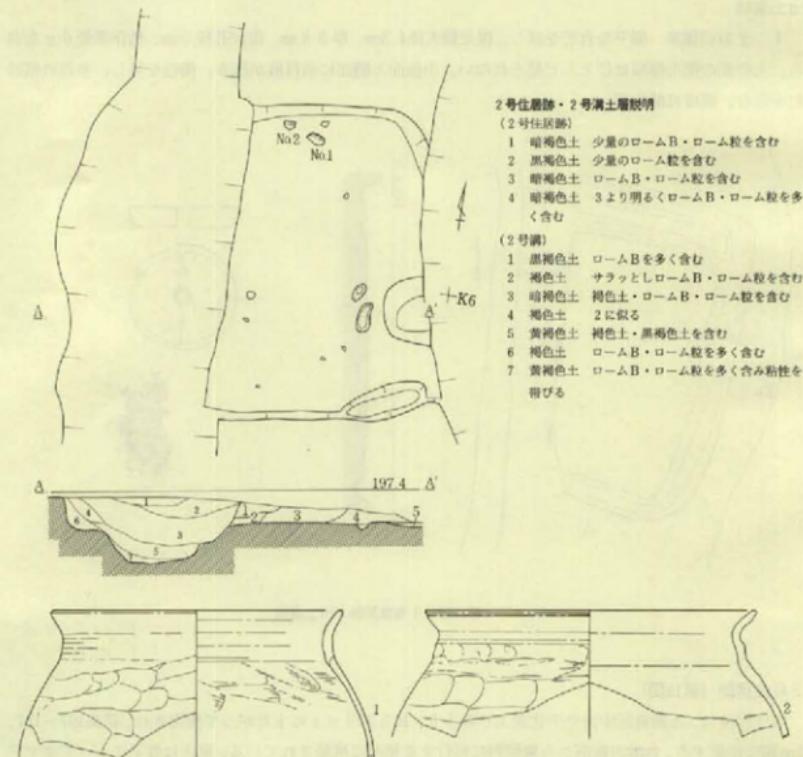
規模は、残存する南北長で3.8mを測り、主軸はN-82°Eにとろう。形状は、東辺の大部分と西辺が消滅しているが方形と考えられる。確認面からの掘り込みは、北壁で30cm、南壁で20cm前後を測る。床面は、ほぼ平坦を呈している。柱穴状の掘り込みは、カマドの掘り方の前面に2カ所見られるが柱穴とは考えに悔い。周溝は、南辺やや東寄りに僅かに検出され、最大幅35cm、深さ10cmを測る。貯藏穴は、検出されない。覆土は、自然堆積と考えられる。

遺物は、全体に少量の出土であったが、北壁でやや2号溝よりにNo1.2の甕の口縁部片、小破片であるが壊片、繩文土器片が検出された。

カマドは、その大部分が削平されて規模・形状は不明である。しかし、住居跡埋土セクションの東端にカマドの掘り方と考えられる浅い皿状の掘り込みが確認できる。

出土遺物

1 甕 弱い「コ」字状口縁を呈する甕の口縁部～腹部上半で約半分が残存。復元口径17.4cm、残存



第16図 2号住居跡・出土遺物

器高9.2cmを測る。調整は、口縁部は横撫で、胴部外面へラ削り、内面へラ撫で。色調はにぶい褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

2 壺 やや崩れた「コ」字状口縁を呈する壺の口縁部～胴部上半で約1/4が残存。復元口径19.9cm、残存器高7.8cmを測る。調整は、口縁部は横撫で、胴部外面へラ削り、内面へラ撫で。色調は赤みを帯びた橙色を呈し、微砂粒を含み、焼成は酸化焰。

3号住居跡（第17図）

当住居跡は、A調査区北方の平坦部M-3グリットで検出され、標高198～198.5m間に位置する。A調査区で最も北で検出され、南東方向には4号住居跡が隣接する。

規模は、東西長3.37m、南北長2.5mを測り、主軸はN-85°-Eをとる。形状は、南辺の東方がやや膨張りの方形を呈する。確認面からの掘り込みは、10～15cmと浅い。床面は、ほぼ平坦である。周溝、柱穴状掘り込みは検出できなかった。貯蔵穴は、明瞭を欠くが南東コーナー部の10cmほどの浅い窪みと考えられる。覆土は、自然堆積状況を呈している。

遺物は、南壁中央の前面にNo.1の坏、南東コーナー部にNo.2の須恵坏片、カマド内の支脚上にはNo.3の「コ」字状口縁を呈する壺片が横転して出土した。

カマドは、東壁中央やや南寄りに構築され、支脚が残存する。焚き口部は壁内部にあり、東方に舌状に張り出す。焚き口から煙道部までの規模は、1.19mを測る。支脚は河床礫を用いている。粘土・袖石は確認できなかったが、燃焼部の側壁は著しく焼土化している。右袖部に当たる位置に鉄滓が出土している。

出土遺物

1 坏（土師器） 復元口径11.3cm、器高3.1cm、復元底径6.8cmを測る。底部手持ちへラ削り、体部は粗い撫で。口縁部～内面は横撫で。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

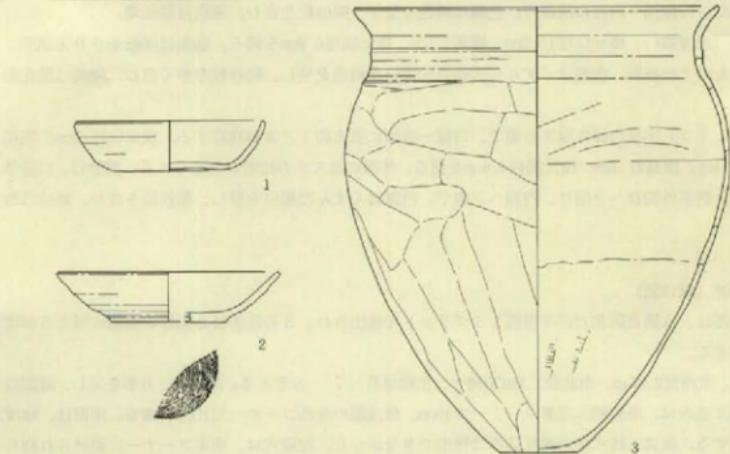
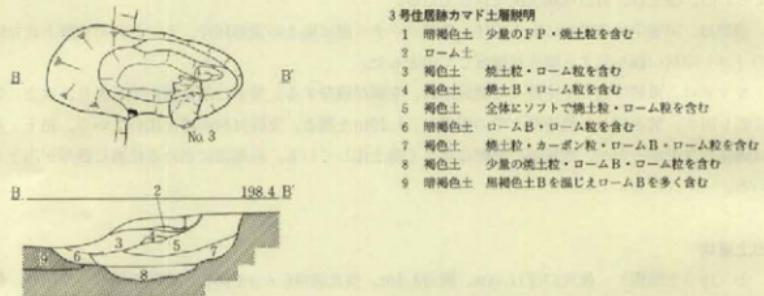
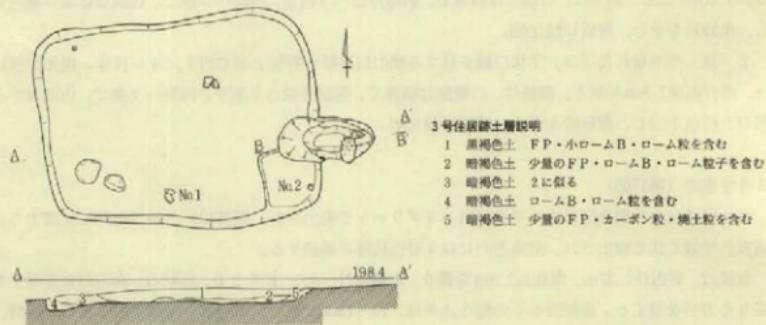
2 坏（須恵器） 復元口径13.2cm、器高3.1cm、復元底径6.9cmを測る。底部は回転糸引き未調整。内外面ともロクロ整形。色調はくすんだ灰褐色～淡い赤褐色を呈し、粗砂粒を多く含む。焼成は酸化焰。

3 壺 「コ」字状口縁を呈する壺で、口縁～底部に至る約1/3が残存する。復元口径22cm、胴部最大径23.4cm、器高27.1cm、復元底径4.6cmを測る。外面にはススの付着が認められる。調整は、口縁部は横撫で、胴部外面はへラ削り、内面へラ撫で。色調はくすんだ褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

4号住居跡（第18図）

当住居跡は、A調査区北方の平坦部L-3グリットで検出され、3号住居跡と同等の標高に当たるが南方に位置する。

規模は、東西長2.85m、南北長2.3mを測り、主軸はE-7°-Sをとる。形状は、方形を呈し、確認面からの掘り込みは、最深部の北東コーナーで40cm、最浅部の南西コーナーで10cmを測る。床面は、ほぼ平坦を呈する。周溝、柱穴状の掘り込みは検出できなかった。貯蔵穴は、南東コーナーに設けられ48×38cmの楕円形を呈し、深さ28cmを測る。覆土は、自然堆積の状況と考えられる。



第17図 3号住居跡・出土遺物

遺物は、南壁中央やや西寄りの上面で鉄鎌と覆土中より土師壺と甕の小破片が出土した。西方部には建築部材と考えられる炭化材が床面より検出された。

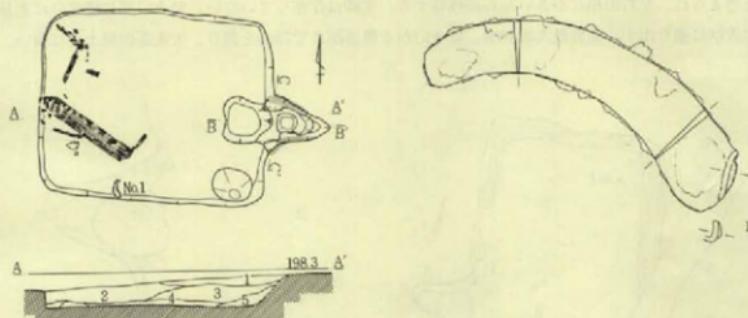
カマドは、東壁中央やや南寄りに灰褐色粘土と河床疊によって構築され、東に三角形状に張り出す。焚き口部の左右には、支柱状に袖石を据えている。袖石の上部幅35cm、下部幅44cmを測る。右袖石の奥にはさらに補強材として石が設けられている。規模は、袖石ラインから煙道部まで80cmを測る。

出土遺物

1 鉄鎌 現存長20.2cm、身幅2.6~4.3cm、重量123gを測る。刃先部が欠けているのか丸みを呈している。身部は緩やかに湾曲し、端部が折れ曲がる。

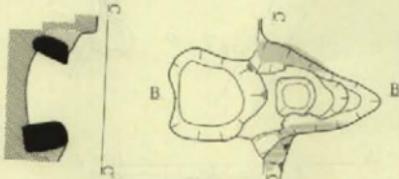
5号住居跡（第19図）

当住居跡は、A調査区北方L2、3グリットにまたがって検出され、標高197.5m前後に位置する。南



4号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 サラッとしたロームB・ローム粒を含む
- 2 墓褐色土 少量のFP・ロームB・ローム粒を含む
- 3 暗褐色土 斑点状にロームB・ローム粒を含む
- 4 墓褐色土 多量の炭化材を含む
- 5 暗褐色土 カーボン粒・ロームB・ローム粒を含む



4号住居跡カマド土層説明

- 1 墓褐色土 サラッとした焼土粒・ロームB・ローム粒を含む
- 2 暗褐色土 灰褐色粘土B・少量の燒土粒を含む
- 3 墓褐色土 多量の燒土粒・灰褐色粘土Bを含む
- 4 墓褐色土 灰褐色粘土B・焼土粒・カーボン粒・ローム粒を含む
- 5 暗褐色土 少量の焼土粒・カーボン粒・ロームB・ローム粒を含む
- 6 暗褐色土 灰褐色粘土状にロームBを多く含む



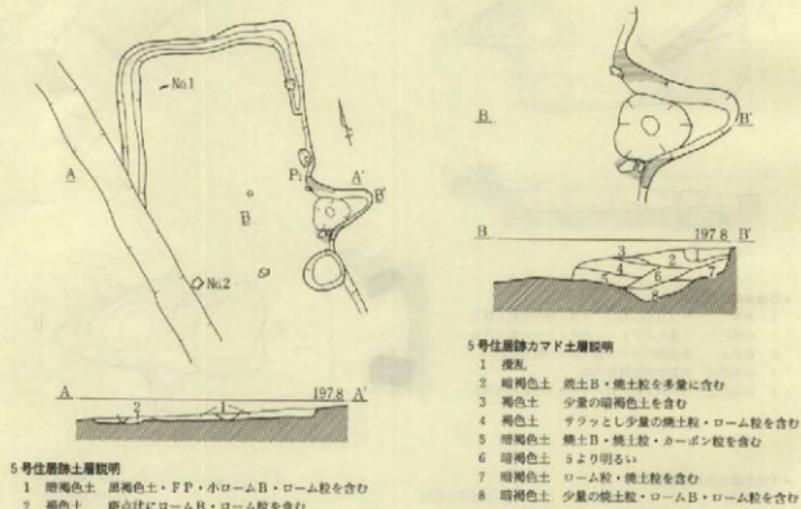
第18図 4号住居跡・出土遺物

西コーナー部に耕作による擾乱溝が走り、北東方向に3、4号住居跡、南東に3号掘立柱建物跡、南西方向に6号住居跡が隣接している。

規模は、東西長2.28m、南北長3.2m以上を測り、主軸はN—83°—Wをとる。形状は南辺が明瞭を欠いているが、やや南辺が広い台形気味とする方形になろう。確認面からの掘り込みは、全体に浅く、北壁部で10cm前後を測る。床面は、北～南に僅かであるが傾斜を呈している。周溝は、東辺のやや北よりから北辺、そして西辺で交差する耕作溝まで検出された。規模は幅15～20cm、深さ2～3cmを測り、断面形は浅い皿状を呈す。柱状掘り込みは、カマド左袖のやや北よりにP1が確認され、21×15cmの隅丸三角形で深さ25cmを測る。貯蔵穴は、カマド右袖の掘り込みが考えられ、40×35cmの円形を呈し、深さ10cm前後と深い。覆土は自然堆積の状況と考えられる。

遺物の出土は僅かで、北西部でNo1の刀子、南西部に壺口縁部辺が検出された。その他、坏片が少量出土しているのみである。

カマドは、東壁の中央やや南寄りに位置し、主軸をW—8°—Sにとる。灰褐色粘土によって構築されたと考えられ、左右の袖に小さい石片が残存する。支脚は存在していない。焚き口部は壁部分にあり、東に舌状に張り出す。燃焼最大幅40cm、焚き口から煙道部まで78cmを測り、火床面の焼土化は弱い。



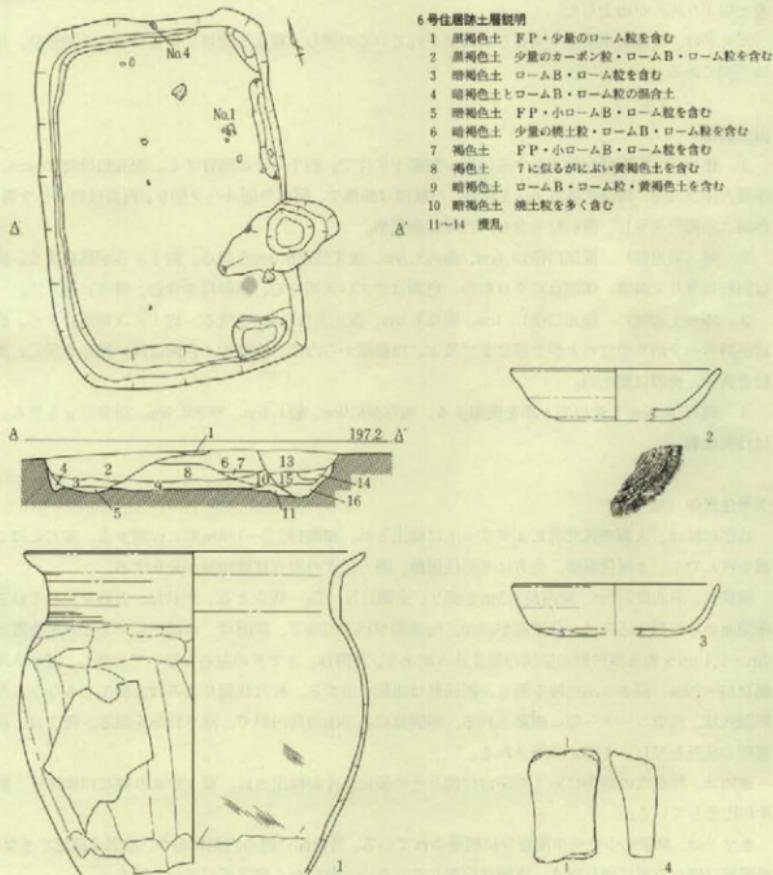
第19図 5号住居跡・出土遺物

出土遺物

1 刀子 現存長11.5cm、身部8cm、茎部残存3.5cm、重量11gを測る。刃部は刃側に弱い段を設けている。切先部はシャープで身部の一部に樹皮、茎部に木質が残る。

2 壺 「コ」字状口縁を呈する壺の口縁～胴部上半が残存する。復元口径14.4cm、残存器高7.5cmを測る。口縁部は横撫で、胴部外面はヘラ削り、内面は弱いヘラ撫で。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

6号住居跡（第20図）



第20図 6号住居跡・出土遺物

当住居跡は、A調査区北西K 2、L 2グリットにまたがって検出され、標高197～197.5m間に位置する。9、13号住居跡とはほぼ一線上にある。

規模は、東西長2.95m、南北長4.5mを測り、主軸はE-10°-Sをとる。形状は南北に長い長方形を呈している。確認面からの掘り込みは、40cm前後を測る。床面は、ほぼ平坦である。周溝は、カマドの両脇と北東部の一部を除いて連続する。その規模は20～35cm、深さ3～5cmと浅い。断面形は緩やかなU字状を呈す。柱穴状の掘り込みは、検出できなかった。貯蔵穴は、南東隅の掘り込みが考えられ、80×55cmの方形で深さ20cm前後を測る。覆土は、人為的な埋土部分と自然堆積部分が考えられる。

遺物は、カマドの北方でNo 1の「コ」字状口縁を呈する甕、北壁の中央の立ち上がりでNo 4の砾石、覆土中より环片が出土した。

カマドは、東壁の中央やや南寄りに構築されているが著しく攪乱を受けているためにその形状、規模は不明である。

出土遺物

1 瓢 「コ」字状口縁を呈する口縁～胴部下半片で、約1/4が残存する。復元口径は20.4cm、胴部最大径21.1cm、残存器高24.6cmを測る。口縁部は横撫で、胴部外面はヘラ削り、内面は軽いヘラ撫で。色調は赤褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

2 壱（須恵器） 復元口径12.6cm、器高3.2cm、復元底径6.9cmを測る。約1/5が残存する。底部は回転糸引き未調整。体部はロクロ整形。色調はにぶい灰褐色で、微砂粒を含む。焼成は還元焰。

3 壱（土師器） 復元口径12.4cm、器高3.1cm、復元底径7.4cmを測る。約1/5が残存する。底部は手持ちヘラ削りで立ち上がり部にまで及ぶ。口縁部から内部は横撫で。色調は淡い褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

4 砾石両端部を除いて4面を使用する。現存長6.9cm、幅4.4cm、厚さ2.9cm、重量95gを測る。石材は流紋岩。

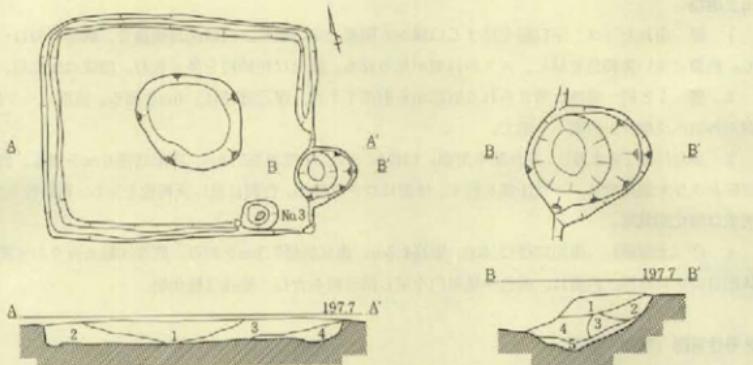
7号住居跡（第21図）

当住居跡は、A調査区北方K 4グリットに検出され、標高197.5～198m間に位置する。東方には2号溝を挟んで1、2号住居跡、南方に8号住居跡、西方に3号掘立柱建物跡が分布する。

規模は、南北長2.7m、東西長3.3mを測り、主軸はN-75°-Wをとる。形状は、方形を呈している。確認面からの掘り込みは、北壁部が28cm、南壁部が15cm前後で、床面は、ほぼ平坦であるが中央部に1.4m×1.15mを測る梢円形の皿状の掘り込みがある。周溝は、カマドの左右を除いて全周し、掘り込みは幅は15～20cm、深さ5cm前後を測る。断面形は皿状を呈す。柱穴状掘り込みは、検出できなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部に確認される。規模は43×35cmの梢円形で、深さ18cmを測る。覆土は、自然堆積の状況を呈し、4層に分層される。

遺物は、貯蔵穴の底面にNo 3の高台付碗とその脇に环片が検出され、覆土中より甕の口縁部片と胴部片が出土している。

カマドは、東壁の中央やや南寄りに構築されている。焚口部は壁の内側にあり、袖部は確認できない。燃焼部は壁から東に張り出す。支脚は存在していない。焚口から煙道部が76cmを測る。

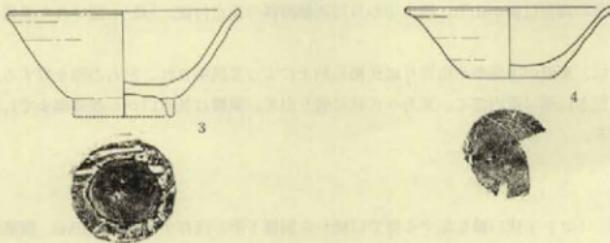
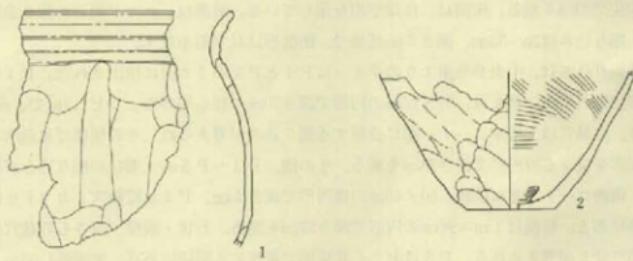


7号住居跡土層説明

- 1 喀褐色土 少量のFP・ロームB・ローム粒を含む
- 2 黄褐色土 小ロームB・ローム粒を含む
- 3 黄褐色土 大きめのロームB・ローム粒を多く含む
- 4 喀褐色土 烟土粒・ロームB・ローム粒を含む

7号住居跡カマド土層説明

- 1 喀褐色土 サラッとした少量の烟土粒・ロームB・ローム粒を含む
- 2 喀褐色土 少量の烟土粒・ロームB・ローム粒を含む
- 3 喀褐色土 斑点状にロームBを含む
- 4 喀褐色土 烟土粒・ロームB・ローム粒を含む
- 5 ローム粒とロームBの混合土で少量の烟土粒・喀褐色土を含む



第21図 第7号住居跡・出土遺物

出土遺物

1 壺 崩れた「コ」字口縁を呈する口縁から胴部上半の破片。口縁部は横撫で、胴部外面はヘラ削り。色調は淡い黄褐色を呈し、スヌの付着が見られる。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は酸化焰。

2 壺 1と同一個体と考えられる底部から胴部下半片。復元底径は5.4cmを測る。底部はヘラ削り、胴部外面ヘラ削り、内面ヘラ撫で。

3 高台付碗(須恵器) 高台部を欠損。口径14.2cm、坏部器高5.3cm、坏部底径6cmを測る。底部は回転糸きり未調整でスノコ状圧痕を残す。体部はロクロ整形。色調は淡い灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰気味。

4 坯(土師器) 復元口径12.4cm、器高4.3cm、復元底径5.1cmを測る。底部回転糸きりの未調整。体部はロクロ整形。色調は、褐色～黒褐色を呈し微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

8号住居跡(第22、23図)

当住居跡は、A調査区中央やや北より平坦部J4グリットに検出され、標高197～197.5m位置する。北方に7号住居跡、西方に9号住居跡、南方に10号住居跡がやや距離を隔てて分布する。

規模は、東西最大幅4.18m、南北5mを測り、主軸はN-70°-Wをとる。形状は、北西コーナー部に擾乱穴が存在するが、東と西辺がやや胴張りを呈する方形である。確認面からの掘り込みは、最深部の北壁中央で33cmを測る。床面は、ほぼ平坦を呈している。周溝は、カマド周辺を除き全周すると考えられる。掘り込みは20～35cm、深さ5cm前後で、断面形はU字形を呈す。

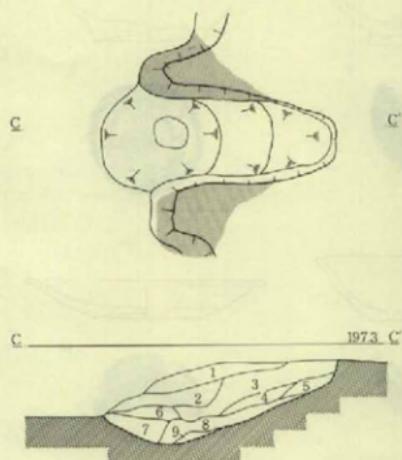
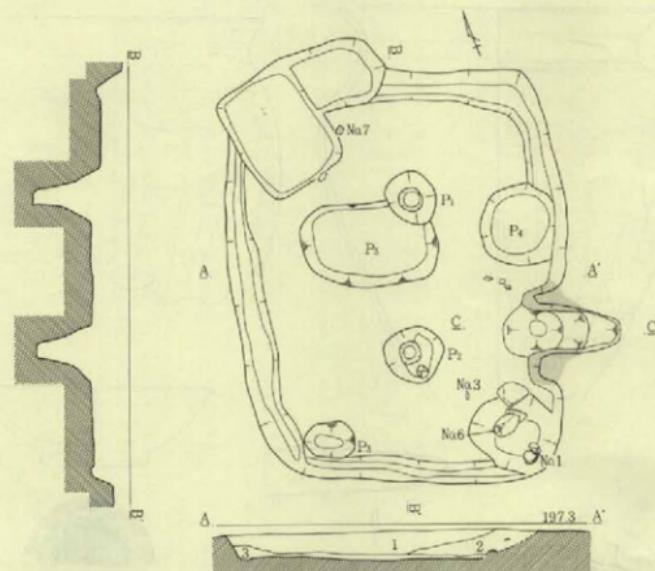
柱状掘り込みは、中央やや東よりのラインにP1とP2の2カ所に検出された。P1は、67×55cmの楕円形で深さ81cm、P2は、69×72cmの円形で深さ70cmで柱心間がちょうど1.8mで、南北辺から1.6mを測る。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置する掘り込みが考えられ、その規模は東西南北長約1mで南北に歪みを呈する楕円形で深さ28cmを測る。その他、P3～P5の土壇状の掘り込みが検出された。P3は、南西コーナー部に位置し60×40cmの楕円形で深さ5cm、P4は貯蔵穴とカマドを挟んで対称の位置関係にある。規模は1m×90cmの円形で深さ27cmを測る。形状・規模・深さも貯蔵穴に類似することから造り変えが考えられる。P5はP2と北東部で重複する関係にあり、東西長1.65m、南北1mの隅丸方形を呈し、深さ10cmを測る。覆土は自然堆積の状況を呈す。

遺物は、当遺跡住居跡の出土量としては多いほうである。貯蔵穴よりNo1の「コ」字状口縁を呈する壺とNo6の高台付碗、貯蔵穴とP2間の床面よりNo3の刀子、カマド左袖の前面よりNo9の須恵壺、北東部でNo7の高台付碗が出土。覆土中からは灰釉陶器の高台付碗、「長」と記された墨書き土器などが検出された。

カマドは、東壁の中央やや南寄りに灰褐色粘土によって構築され、左右の袖を有する。支脚は検出されない。焚き口部は壁内部で、東方へ舌状に張り出す。規模は焚き口から煙道部まで1.42m、燃焼部幅45cmを測る。

出土遺物

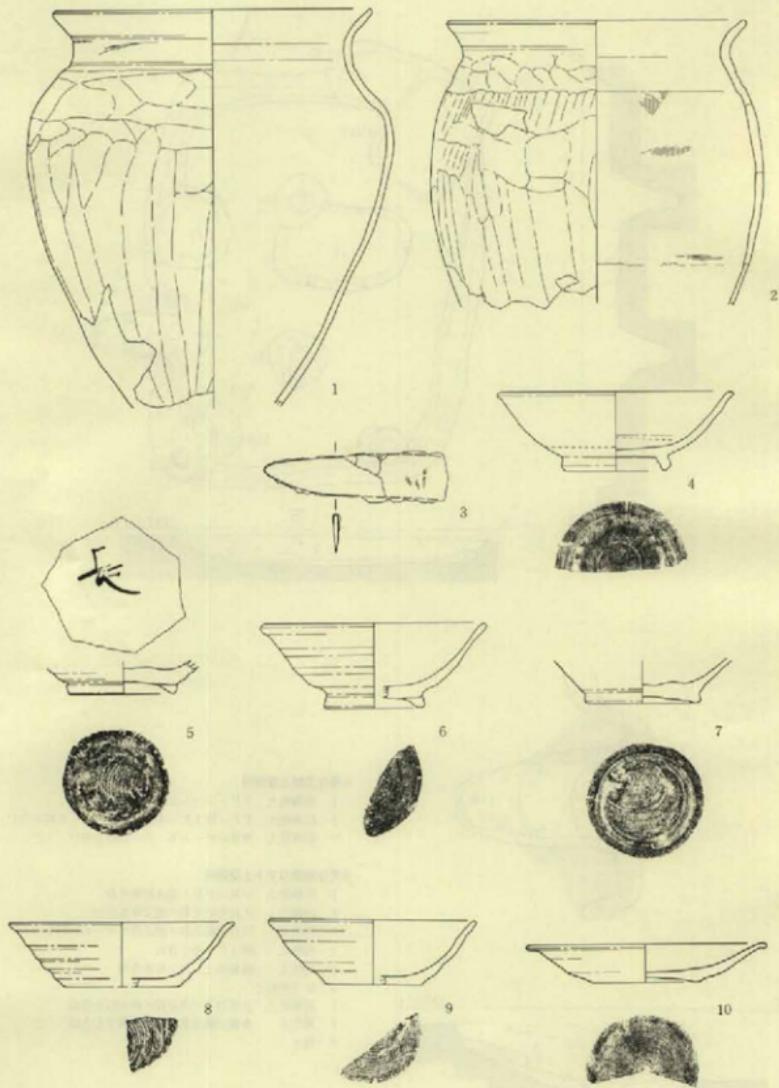
1 壺 「コ」字状口縁を呈する壺で口縁から胴部下半が残存する。口径19cm、胴部最大径22.2cm、残存器高24cmを測る。やや肩張りの形状を呈する。口縁部は横撫で、胴部外面はヘラ削り、内面弱いヘラ撫で。色調はくすんだ褐色～淡い赤褐色を呈し、胴部下半にスヌ付着。粗砂粒を多く含む。焼成は酸化



第22図 8号住居跡

8号住居跡土層説明

- 1 黒褐色土 F P・ロームB・ローム粒を含む
- 2 暗褐色土 灰白色粘土B・焼土Bを含む
- 3 暗褐色土 F P・焼土粒・小ロームB・ローム粒を含む
- 4 暗褐色土 多量のロームB・ローム粒を含む
- 5 褐色土 烧土Bを多く含む
- 6 灰白色粘土
- 7 暗褐色土 少量のカーボン粒・焼土粒を含む
- 8 褐色土 多量の焼土B・灰白色粘土を含む
- 9 焼土



第23圖 8號住居跡出土遺物

焰。

2 瓢 崩れた「コ」字状口縁を呈する甕で口縁から胴部中位にかけて1/2が残存する。口径17.8cm、胴部最大径20.1cm、残存器高17.4cmを測る。口縁部は横撫で、頭部に指頭圧痕を残す。胴部外面はヘラ削り、内面ヘラ撫で。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

3 刀子 身部のみが残る。現存長11.1cm、刃幅2.7cm、重量39gを測る。木質が僅かに残る。

4 高台付碗(灰釉陶器) 半分弱が残存。復元口径14cm、器高4.8cm、底径6cmを測る。高台は所謂三日月を呈し、施釉はハケ掛である。光カ丘窯式の所産と考えられる。

5 高台付碗(須恵器) 坏部の大半を欠損する。底径6.4cm、残存器高1.6cmを測る。底部は回転糸きり未調整。坏部内面に「長」と考えられる墨書きを記す。色調は灰白色を呈し、粗砂粒を多く含む。焼成は還元焰。

6 高台付碗(須恵器) 約1/2が残存。復元口径13.3cm、器高5.2cm、復元底径6cmを測る。底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形でロクロ目を明瞭に残す。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰気味。

7 高台付碗(須恵器) 坏部を大きく欠損する。底径7cm、残存器高2.5cmを測る。底部は回転糸きり未調整。色調は灰褐色で粗砂粒を多く含む。焼成は還元焰。

8 坏(須恵器) 約1/4が残存。復元口径13.3cm、器高3.9cm、復元底径6.8cmを測る。底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形でロクロ目を明瞭に残す。色調は灰褐色へくすんだ黒褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

9 坏(須恵器) 約1/4が残存。復元口径12.4cm、器高3.9cm、復元底径5.9cmを測る。底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

10 坏(須恵器) 形状は皿形。復元口径14.2cm、器高2.3cm、底径6.4cmを測る。底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形。底部内面は横撫で。色調は灰褐色を呈し、胎土に変成岩を多く含む。焼成は還元焰。

9号住居跡(第24図)

当住居跡は、A調査区西北よりの平坦部J2グリットに検出され、標高196.5m前後に位置する。繩文土壤(JD7)が北東コーナーで重複する。東方に8号住居跡、北方に6号住居跡、南東にややはなれて1、2号掘立柱建物跡が分布する。

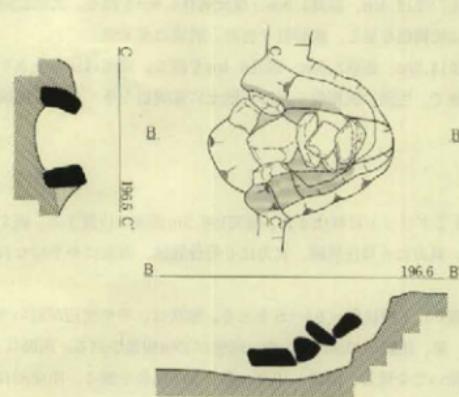
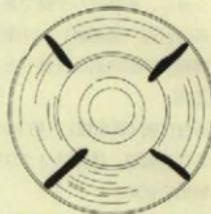
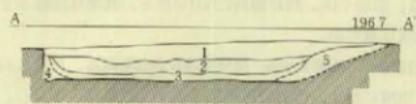
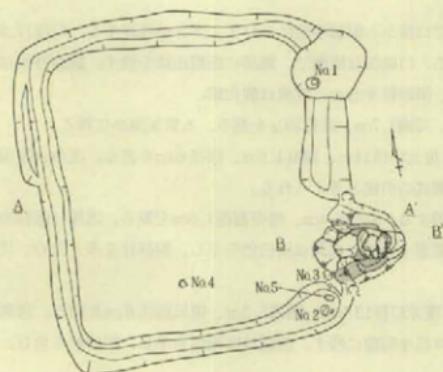
規模は、東西長3.75m、南北長4.15mを測り、主軸はE—6'—Sをとる。形状は、やや南辺が短い方形を呈している。確認面からの掘り込みは、東、北壁が40cm以上、西、南壁が35cm前後を測る。床面は、ほぼ平坦である。周溝は、カマドの両脇を除いて全周し、幅25~30cm、深さ5cm前後を測る。断面形はU字形を呈する。柱穴掘り込み、貯蔵穴は検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を呈している。

遺物は、その大半が坏類で南東隅に集中して出土した。北東隅で検出されたNo.1は墨書き土器である。

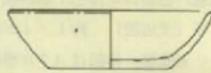
カマドは、東壁の南寄りに石と灰褐色粘土で構築され、壁内部に袖部の張り出しを設けている。袖部には支柱状に袖石を据える。袖石の上部幅30cm、下部幅38cmを測る。焚き口は壁内部に設け、東方に燃焼部と煙道部を舌状に張り出させ、その間1.12mを測る。カマド内部には天井石と考えられる石が崩落している。袖石の上面には鳥居状に天井石を架けていたと見られる。内部の崩落した石の中に支脚と考えられる立石が見られる。火床面は、著しく焼土化している。

9号住居跡土層説明

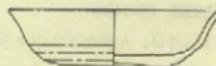
- 1 黒褐色土 FP・ローム粒を含む
- 2 暗褐色土 少量のFP・小ロームB・ローム粒を含む
- 3 晴褐色土 カーボン粒・ロームB・ローム粒を含む
- 4 ローム 少量の暗褐色土を含む
- 5 褐色土 カーボン粒・ロームB・ローム粒を含む



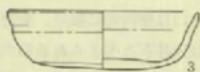
B'



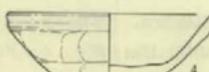
1



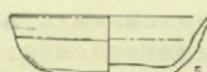
2



3



4



5

第24図 9号住居跡・出土遺物

出土遺物

1 坯（須恵器） 完形。口径12.5cm、器高3.5cm、底径7.2cmを測る。底部は回転糸きり後に周縁部を回転ヘラ削り。胎部はロクロ整形。内面底部は使用による擦れが見られる。また、内面立ち上がりから口唇部にかけて4カ所に墨書きを施す。色調はくすんだ褐色～灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰気味。

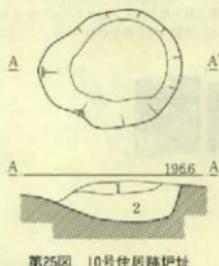
2 坯（須恵器） ほぼ完形。口径12.7cm、器高3.5cm、底径6.6cmを測る。底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形。色調は乳白色～くすんだ灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰気味。

3 坯（土師器） 完形。口径11.5cm、器高3.6cm、底径8.8cmを測る。全体に器面が荒れている。底部は手持ちヘラ削りと考えられる。口縁部は横撫で。色調は赤褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰。

4 坯（土師器） 約1/3が残存。復元口径12.4cm、器高4cm、復元底径6cmを測る。底部の調整は明瞭でないが手持ちヘラ削りと思われる。体部外面は弱いヘラ削り、口縁部は横撫で。色調は褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰。

5 坯（土師器） 約2/3が残存。口径12cm、器高3.8cm、底径8.2cmを測る。底部はやや丸底底味を呈し、手持ちヘラ削り。体部下半は未調整か。口縁部は横撫で。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

10号住居跡（第25図）



第25図 10号住居跡炉址

当住居跡は、A調査区中央の平坦部H4グリットに検出され、標高196.5～197m間に位置する。西方には1、2号掘立柱建物跡が分布する。

残存部分のその範囲は、88×72cmの楕円形を呈し、最深部で20cmを測る。その堆積は2分層され、灰褐色粘土焼土粒の混入からカマドと推察される。住居跡の全体像は把握できないが、東にカマドを有すると考えられる。出土遺物は皆無であった。

10号住居跡土層説明

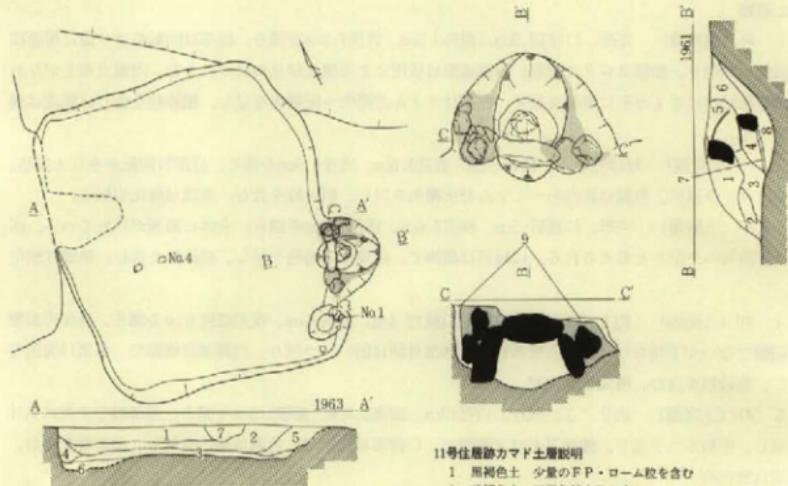
- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 褐色土 | 黄灰褐色粘土・焼土粒を含む |
| 2 | 暗褐色土 | 少量の黄灰褐色粘土・焼土粒・褐色土を含む |

11号住居跡（第26図）

当住居跡は、A調査区中央やや西よりの平坦部G3グリットに検出され、標高196m前後に位置する。西壁部で12号住居跡と重複関係にあり、11号住居跡を切って構築されている。北東コーナー部の上面は3号溝によって切られている。

規模は、長軸の南北長3.75m、東西最大長3.35mを測り、主軸はN-80°-Wをとる。形状は、東辺が胴張りを呈する方形である。確認面からの掘り込みは、東壁部が44cmを測る。床面は、中央やや北方を頂点として南西方向に緩やかな傾斜を呈する。柱穴、周溝は検出できなかった。貯蔵穴は南東コーナー部に検出され、45×37cmの楕円形を呈し、深さ11cmを測る。覆土は自然堆積の状況を示している。

遺物は、貯蔵穴上面にNo.1の壺、中央やや西にNo.4の高台付碗、カマド内の支脚上に横転した状況で壺の胸部片、覆土中より环等が検出された。

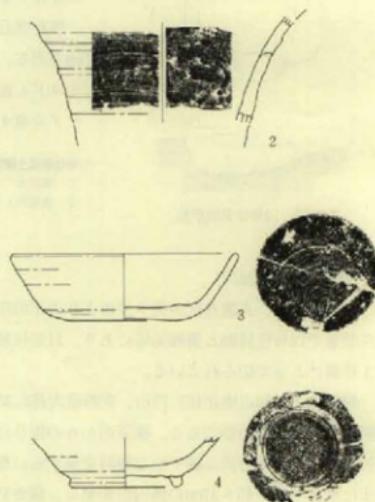
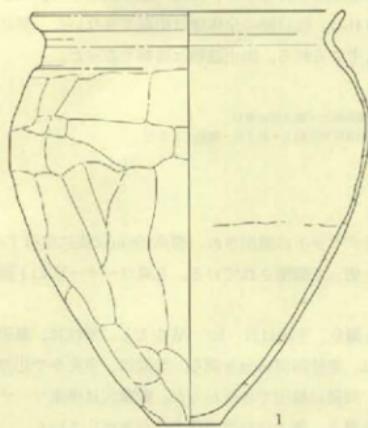


11号住居跡土層説明

- 1 黒褐色土 F P・焼土粒・ロームB・ローム粒を含む
- 2 黒褐色土 少量のF P・ロームB・ローム粒・暗褐色土を含む
- 3 暗褐色土 ロームB・ローム粒を多く含む
- 4 黒褐色土 サラッとした少量の焼土粒・暗褐色土を含む
- 5 黒褐色土 少量のF P・焼土粒・ローム粒を含む
- 6 1 2号住居跡カマド

11号住居跡カマド土層説明

- 1 黒褐色土 少量のF P・ローム粒を含む
- 2 暗褐色土 灰褐色粘土Bを含む
- 3 暗褐色土 焼土粒・ローム粒を含む
- 4 褐色土 全体にサラッとした灰褐色粘土Bを含む
- 5 暗褐色土 少量のF P・灰褐色粘土B・焼土粒を含む
- 6 褐色土 多量の焼土B・焼土粒・少量のカーボン粒を含む
- 7 黄褐色土 サラッとした少量の焼土粒を含む



第26図 11号住居跡・出土遺物

カマドは、東壁の中央やや南よりに石組みで構築され、N—55°—Wの主軸を呈する。焚き口部を東壁ライン上として東に卵形に張り出す。焚き口部は支柱状に斜傾する石を埋め込み、長めの石を天井石として鳥居状に架す。支柱石はさらに灰褐色粘土と礫で補強している。焚き口の規模は最大幅45cm、火床面より17cm、掘り方より27cmの高さを測る。支脚には石を用い、上面には甕の胸部片が焚き口方向に横転している。焚き口から煙道部まで76cmを測る。火床面には明瞭に灰層が残る。

出土遺物

- 1 壺 崩れた「コ」字状口縁を呈し、ほぼ完形。カマド内の支脚上の胸部片と貯蔵穴出土の口縁部片との接合。18.6cm、胸部最大径21.8cm、器高25.1cm、底径3.9cmを測る。口縁部は横撫で、胸部外面はヘラ削り、内面はヘラ撫で、底部ヘラ削り。口縁部に輪積痕を残す。胸部最大径付近までスヌ付着。色調は褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰。
- 2 瓢形土器の頸部片（須恵器）
- 3 壺（須恵器） 体部約1/5残存。復元口径13.6cm、器高4cm、底部8.1cmを測る。底部は回転糸きりによる切り放し後、周縁部と立ち上がり部に回転ヘラ削りを施す。体部はロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。
- 4 高台付碗（須恵器） 壺部を大きく欠損する。底径6.3cm、残存器高3cmを測る。色調はくすんだ灰白色を呈し、粗砂粒を多く含む。焼成は還元焰。

12号住居跡（第27、28図）

当住居跡は、A調査区H 3 グリットポイントを包括し、カマドの燃焼部～煙道部が11号住居跡と重複して検出され、標高196m前後に位置する。南東部で11号住居跡と重複し、北方に3号溝を挟んで1、2号掘立柱建物跡、南方に13、14号住居跡が分布する。

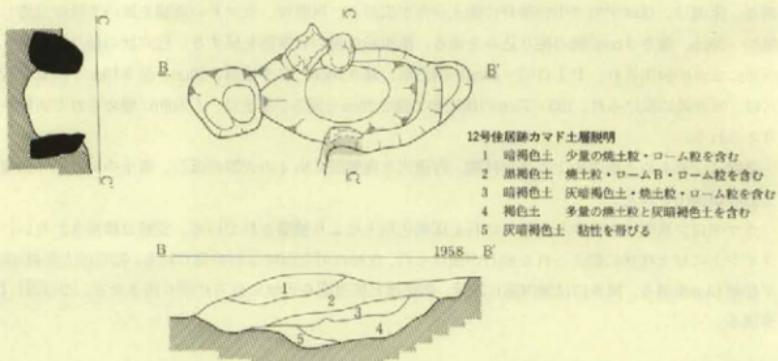
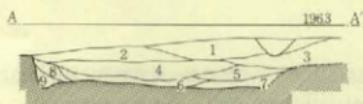
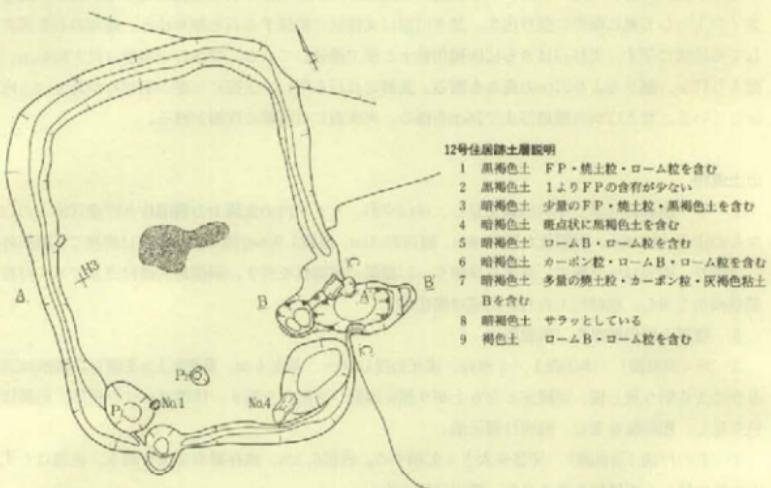
規模は、東西中央部分で3.53m、南北中央部分で4.82mを測り、主軸はE—16°—Sをとる。形状は、やや台形気味の方形を呈する。確認面からの掘り込みは、最深部の南東で45cm、最浅部の南西で24cmを測る。床面は、ほぼ平坦で中央部分に焼土分布が広がる。周溝は、カマドの両脇を除いてほぼ全周し、幅20～30cm、深さ5cm前後の掘り込みを測る。断面形は浅いU字形を呈する。柱穴状の掘り込みは、南西部に2ヵ所検出され、P 1は65×50cmの楕円形、深さ20cm、P 2は24×20cm、深さ10cmを測る。貯蔵穴は、南東隅に設けられ、105×75cmの楕円形で深さ20cmを測る。覆土は、人為的に埋められた可能性が考えられる。

遺物は、P 1の上面でNo.1の高台付碗、貯蔵穴と南壁間にNo.4の大型の砥石、覆土中よりNo.3の墨書き器等が検出された。

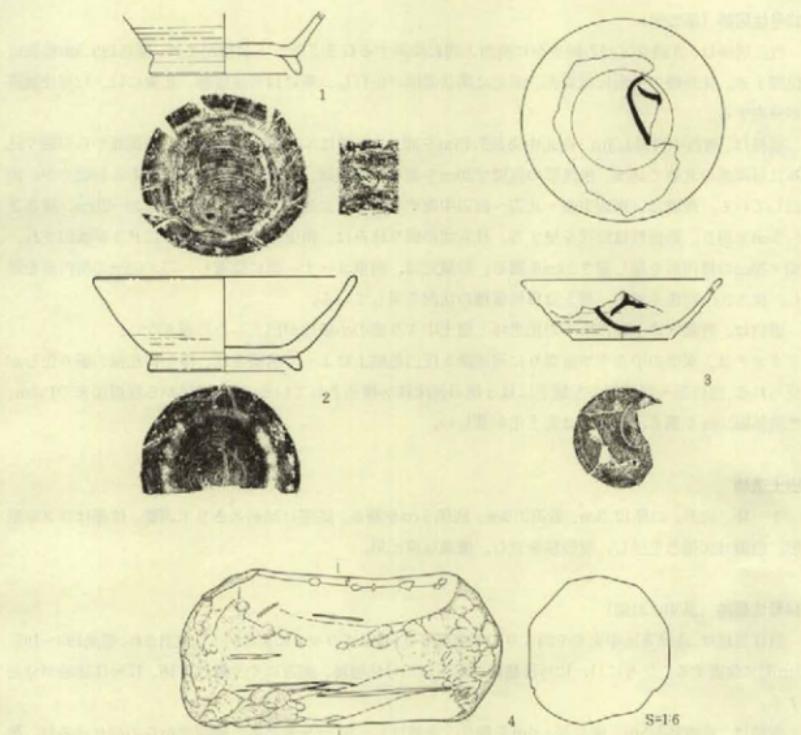
カマドは、東壁の中央やや南寄りに石と灰褐色粘土により構築されている。支脚は検出されない。壁ライン上には支柱状に据えられた袖石が設けられ、左袖石の全面には石が見られる。袖石の上部幅30cm、下部幅42cmを測る。焚き口は壁内部に設け、燃焼部と煙道部を舌状に東方に張り出させる。この間1.4mを測る。

出土遺物

- 1 高台付碗（須恵器） 壺部を大きく欠損する。底径9cm、残存器高3.6cmを測る。底部は回転糸



第27図 12号住居跡



第28図 12号住居跡出土遺物

り未調整。体部はロクロ整形でロクロ目が明瞭に残る。高台内部に初痕が見られる。色調は外面くすんだ黒褐色、内面灰白色を呈し、微砂粒を多く含む。焼成は還元焰。

2 高台付碗（須恵器） 復元口径15.6cm、器高5.7cm、底径9cmを測る。底部は回転糸きり後に回転ヘラ削りで調整し、体部下半にも施す。体部はロクロ整形。色調は褐色～くすんだ灰褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は還元焰。

3 坯（土師器） 口縁部を欠損する。底径6cm、残存器高3cmを測る。内外面に墨書を記すが全容は不明。底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

4 磨石 安山岩質の大形置砾。

13号住居跡（第29図）

当住居跡は、A調査区西方緩やかに南西方向に傾斜するG2グリットに検出され、標高195.5m前後に位置する。住居跡の上面には東西、南北に溝状遺構が走行し、東に14号住居跡、北東に11、12号住居跡が分布する。

規模は、東西中央長4.3m、南北中央長5.15mを測り、主軸はN-72°-Wをとる。確認面からの掘り込みは最深部の北東で46cm、最浅部の西壁で20cmを測る。床面は、北東～南西に僅かであるが緩やかに傾斜している。周溝は、東辺中央～北辺～西辺中央やや北よりに連続して検出され、幅20～25cm、深さ3～5cmを測り、断面形は皿状を呈する。柱穴状の掘り込みは、南壁中央やや西よりにP1が検出され、30×20cmの梢円形を呈し深さ20cmを測る。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置し、75×62cmの梢円形を呈し、深さ20cm前後を測る。覆土は自然堆積の状況を呈している。

遺物は、貯蔵穴の上面にNo1の須恵壺と覆土中より壺の小破片が出土したに過ぎない。

カマドは、東壁の中央やや南寄りに河床礫と灰白色粘土によって構築され、僅かに左袖の張り出しが見られる。燃焼部～煙道部の左側壁には3個の河床礫が補強されている。焚き口部から煙道部まで1.3m、燃焼部幅50cmを測る。火床面は焼成化が著しい。

出土遺物

1 壺 完形。口径12.3cm、器高3.9cm、底径5cmを測る。底部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

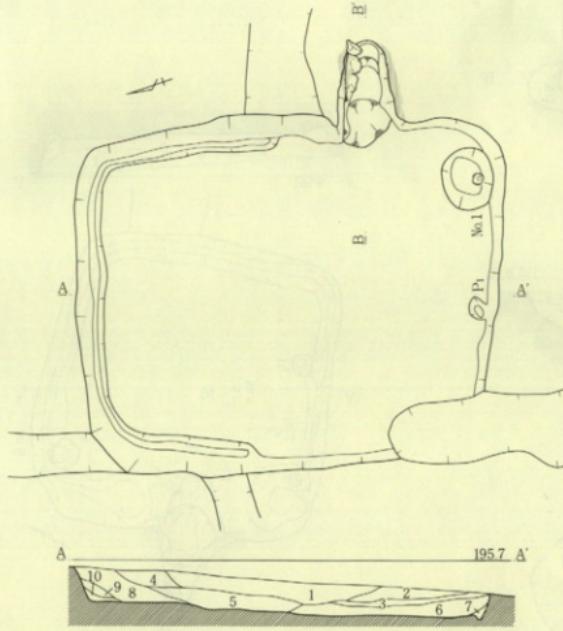
14号住居跡（第30、31図）

当住居跡は、A調査区中央やや西よりの平坦部F3、G3グリットにまたがって検出され、標高195～195.5m間に位置する。北方に11、12号住居跡、西方に13号住居跡、南方にやや離れて16、17号住居跡が分布する。

規模は、東西長3.5m、南北長3.6mを測り、主軸はE-20°-Sをとる。確認面からの掘り込みは、最深部の北東隅で45cm、最浅部の南西隅で24cmを測る。床面は、平坦に構築されている。周溝はカマドの両脇を除いて全周し、幅30cm前後、深さ4～10cmを測る。断面形はU字形を呈する。柱穴状掘り込みは、南壁中央やや西寄りのP1、北西隅のP2、貯蔵穴内のP3の3カ所が検出された。P1は27×25cmの円形で深さ9cm、P2は35×33cmの円形で深さ20cm、P3は径16cmの円形で深さ20cmを測る。貯蔵穴は南西コーナー部に設けられ、85×75cmの歪んだ方形を呈し深さ23cmを測る。覆土は、自然堆積の状況を呈している。

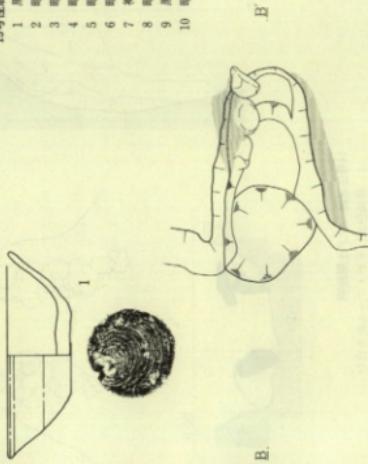
遺物は、カマド内と前面にNo1、2の「コ」字状口縁を呈する壺、P1の上面でNo6の灰釉小瓶、覆土中よりNo7の灰釉高台付碗、No8の墨書き土器等、さらにカマドの補強材としてNo5の須恵壺の胴部片とNo10の須恵壺が検出された。

カマドは、東壁中央やや南寄りに石、灰褐色粘土と土器片によって構築され、焚き口部は壁内部にあって支脚はない。燃焼部と煙道部は東方に舌状に張り出す。右側壁部には4個の石とNo5の須恵壺の胴部片、左袖部～側壁部には11個の石とNo10の須恵壺が使用され、煙道部付近にはNo1の壺片が出土している。左側壁の石列には部分的に3段に石積みがなされている。石は全てが河床礫である。焚き口部から煙道部まで1.66mを測る。



13号住居跡土層説明

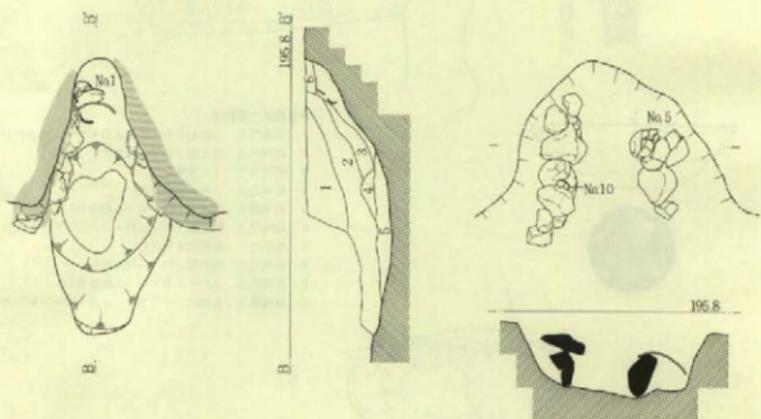
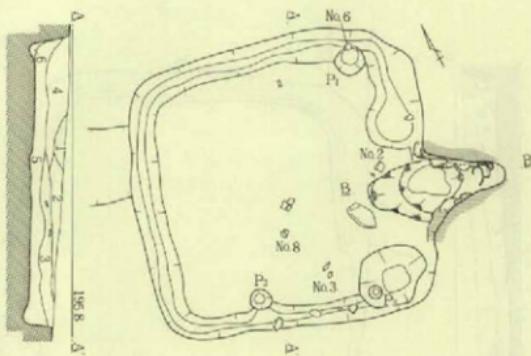
- 1 黑褐色土 少量のFP・ロームB・ローム粒を含む
- 2 明褐色土 焼土粒・ローム粒を含む
- 3 明褐色土 2より薄い
- 4 明褐色土 ローム粒を含む
- 5 明褐色土 小ロームB・ローム粒を含む
- 6 明褐色土 小ロームB・カーボン粒を含む
- 7 褐色土 黃褐色土を含む
- 8 明褐色土 斑点状にロームBを含む
- 9 黑褐色土 小ロームB・ローム粒を含む
- 10 黑褐色土 全体にソフトロームB・ローム粒を含む



13号住居跡カマド上部説明

- 1 明褐色土 淡白色粘土・焼土粒を含む
- 2 明褐色土 淡白色粘土B・焼土Bを多く含む
- 3 黑褐色土 焼土粒を含む
- 4 明褐色土 焼土粒を多く含む
- 5 明褐色土 少量のFP・焼土粒を含む
- 6 黄褐色土 焼土粒・焼土Bを多く含む
- 7 黑褐色土 焼土粒・ロームB・ローム粒を含む

第29図 13号住居跡・出土遺物



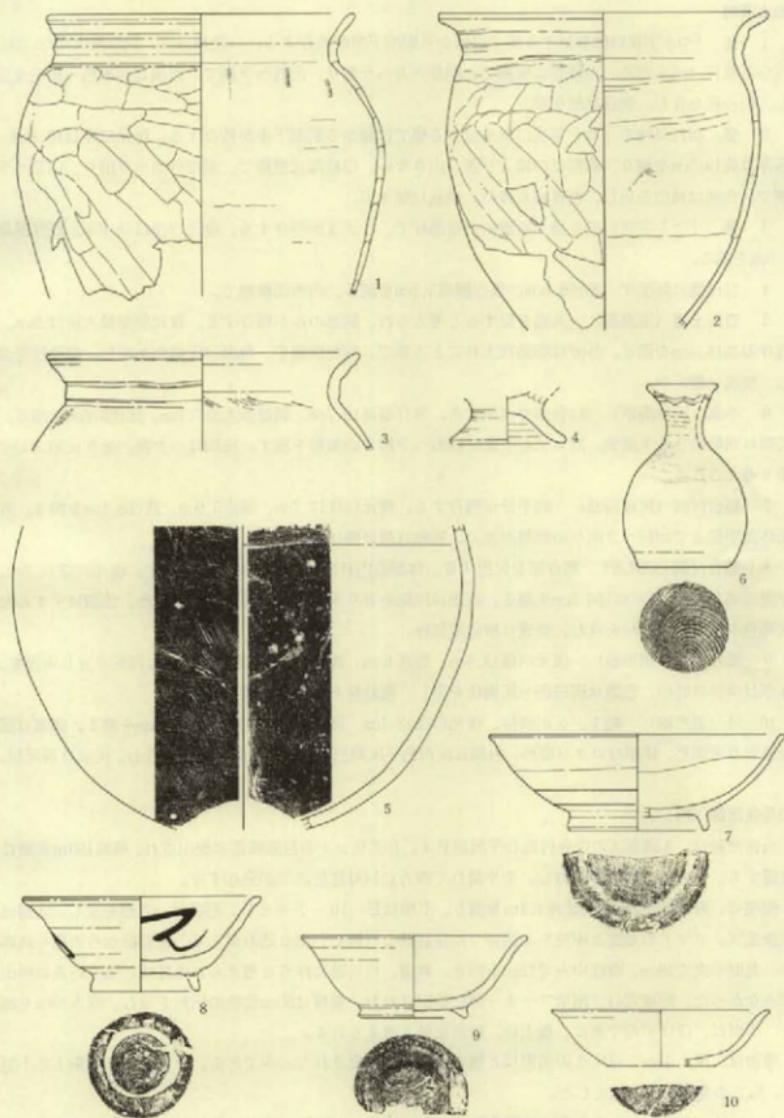
14号住居跡土層説明

- 1 混状遺構
- 2 黒褐色土 FP・少量のカーボン粒・ローム粒を含む
- 3 暗褐色土 黒褐色土・FP・少量のカーボン粒・ローム粒を含む
- 4 暗褐色土 3層より明るくFP・カーボン粒・ローム粒を含む
- 5 黑褐色土 FP・ロームB・ローム粒を含む
- 6 暗褐色土 ローム粒を多く含む

14号住居跡カマド土層説明

- 1 黒褐色土 FP・ローム粒を含む
- 2 灰褐色粘土と燒土粒の混合土
- 3 褐色土 燃土B・燒土粒を含む
- 4 黑褐色土
- 5 褐色土 少量のカーボン粒・燒土B・燒土粒を含む
- 6 褐色土 燃土B・燒土粒を含む

第30図 14号住居跡



第31図 14号住居跡出土遺物

出土遺物

1 壺 「コ」字状口縁を呈する壺で口縁から胴部下半が残存する。口径18.4cm、胴部最大径22.2cm、残存器高17.4cmを測る。口縁部は横撫で、胴部外面へラ削り、内面へラ撫で。色調は赤褐色～褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰。

2 壺 崩れ気味の「コ」字状口縁を呈する壺で口縁から胴部下半が残存する。復元口径は19.8cm、残存器高19.3cmを測り、胴部は口縁より張り出さない。口縁部は横撫で、胴部外面へラ削り、内面へラ撫で。色調は褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰。

3 壺 「コ」字状口縁を呈する壺の口縁部で、1／5が残存する。復元口径は18.6cm、残存器高5.9cmを測る。

4 台付壺の脚部片 底径6.8cm、残存器高3.1cmを測る。内外面横撫で。

5 壺形土器（須恵器） 丸底を呈すると考えられ、胴部のみが残存する。復元胴部最大径は28cm、残存器高18.4cmを測る。外面は櫛齒状工具による撫で、内面横撫で。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

6 小瓶（灰釉陶器） 口唇部を欠損する。残存器高10.7cm、胴部最大径7.7cm、底径5.6cmを測る。底部は回転糸引き未調整。立ち上がり部に回転へラ削りの調整を施す。施釉はハケ掛。光ヶ丘窯式の所産と考えられる。

7 高台付碗（灰釉陶器） 約半分が残存する。復元口径17.7cm、器高5.9cm、底径8.1cmを測る。外面体部中位まで回転へラ削りの調整が及ぶ。施釉は潰け掛け。

8 高台付碗（須恵器） 高台部を欠損する。体部の内外面に「方」？の墨書を施す。復元口径14.2cm、坏部器高4.7cm、坏部底径6.2cmを測る。底部は回転糸引き未調整。体部はロクロ整形。色調はくすんだ灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰気味。

9 高台付碗（須恵器） 復元口径13.5cm、器高6cm、底径6.3cmを測る。底部は回転糸引き未調整。体部はロクロ整形。色調は灰白色～灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

10 坏（須恵器） 約1／3が残存。復元口径13.1cm、器高3.5cm、復元底径6.5cmを測る。底部は回転糸引き未調整。体部はロクロ整形。色調は灰白色～灰褐色を呈し、微砂粒を多く含む。焼成は還元焰。

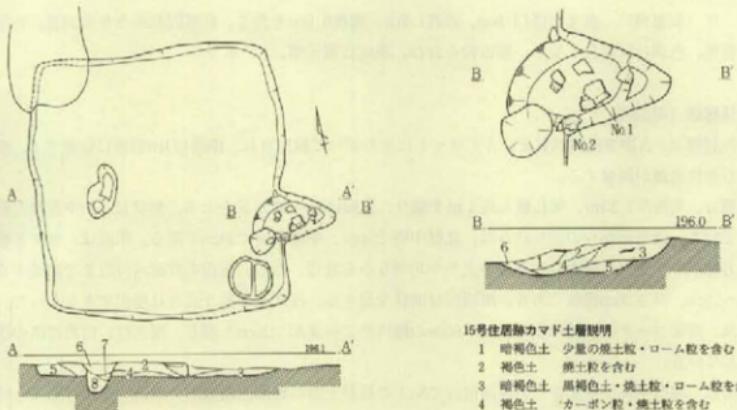
15号住居跡（第32図）

当住居跡は、A調査区の中央付近の平坦部F4、5グリットの台地鞍部に検出され、標高196m前後に位置する。北方に3号溝が走行し、やや離れて西方に14号住居跡等が分布する。

規模は、東西長3.1m、南北長3.3mを測り、主軸はE—10°—Sをとる。形状は、方形を呈し、北西部に擾乱穴、カマド右袖部と中央やや西寄りに住居跡より新しい掘り込みがある。確認面からの掘り込みは、北壁中央で28cm、南壁中央で12cmを測る。周溝、住居跡に伴うと考えられる柱状の掘り込みは検出できなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出された。規模は50cm前後の円形を呈し、深さ10cmを測る。床面は、ほぼ平坦である。覆土は、自然堆積と考えられる。

遺物は、覆土中からはNo3の須恵壺と僅かな細片が検出されたのみである。カマド内よりNo1の小型壺、No2の高台付碗が出土した。

カマドは、東壁の中央やや東に構築されているが袖部、支脚等は検出できなかった。焚き口は壁内部にあり燃焼部、煙道部が東方へ舌状に張り出す。焚き口から煙道部まで約1mを測る。火床面の焼土は

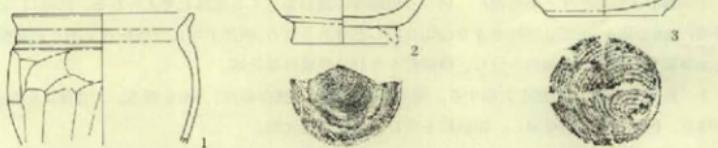


15号住居跡土層説明

- 1 黒褐色土 多くのFP・ローム粒を含む
- 2 黒褐色土 FPを含む
- 3 暗褐色土 ロームBを多く含む
- 4 暗褐色土 少量のFP・ロームB・ローム粒を含む
- 5 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 6 棕褐色土 サラッとしている
- 7 暗褐色土 サラッとしたローム粒を含む
- 8 暗褐色土 少量のロームB・ローム粒を含む

15号住居跡カマド土層説明

- 1 暗褐色土 少量の燒土粒・ローム粒を含む
- 2 棕褐色土 燃土粒を含む
- 3 暗褐色土 黒褐色土・燒土粒・ローム粒を含む
- 4 棕褐色土 カーボン粒・焼土粒を含む
- 5 ローム 燃土粒を含む



第32図 15号住居跡・出土遺物

弱い。

出土遺物

1 小型壺 「コ」字状口縁を呈し、約1/3の口縁部から胸部中位が残存。復元口径10.4cm、胴部最大径11.7cm、残存器高8cmを測る。口縁部は横撫で、胴部外面へラ削り、内面弱いへラ撫で。色調は赤みを帯びる褐色を呈し、粗砂粒を多く含む。焼成は酸化焰。

2 高台付椀(須恵器) 高台を欠損し、坏部半分ほどが残存。復元口径13cm、坏部高4.6cm、坏部底径6.3cmを測る。底部は回転糸きり未調整。体部はクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。

焼成は還元焰。

3 壺(須恵器) 復元口径13.8cm、器高4.2cm、底径6.9cmを測る。底部回転糸きり未調整。体部ロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

16号住居跡(第33図)

当住居跡は、A調査区南西E2、3グリットにまたがって検出され、標高194m前後に位置する。南西には17号住居跡が隣接する。

規模は、東西長3.25m、南北最大長4mを測り、主軸はE-33°-Sをとる。形状は、やや歪む方形を呈している。確認面からの掘り込みは、北壁中央で50cm、南壁中央で38cmを測る。床面は、カマド前面と南方部がやや窪む。周溝は、東辺中央やや北寄りから北辺、西辺、南辺の貯蔵穴付近まで連続する。幅20~25cm、深さ3cm程度である。断面形は皿状を呈する。柱穴状の掘り込みは検出できなかった。貯蔵穴は、南東コーナーに設けられ、65×60cmの梢円形で最深部で25cmを測る。覆土は、自然堆積の状況を示している。

遺物は、東壁中央やや北寄りの周溝付近でNo.1の壺形土器の底部、西壁下の周溝内からはNo.4の紡錘車、覆土中より壺、壺蓋片等が出土した。

カマドは東壁の中央やや南寄りに石と灰褐色粘土により構築されている。焚き口部は壁内部に設けられ、燃焼部と煙道部は東方へ舌状に張り出す。支脚は存在していない。壁内部に突出する袖部は左袖が長い。右側壁には石が補強されている。焚き口から煙道部まで1.28m、燃焼部幅45cmを測る。

出土遺物

1 壺形土器底部片(須恵器) 恐らく短頸壺の器形を呈する底部と考えられる。底径11.5cm、残存器高7.4cmを測る。底部は回転糸きりの切り放しと考えられる。胴部下半には回転ヘラ削りの調整を施す。内面横撫で。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

2 蓋(須恵器) 鉢部を欠損する。復元口径15.3cm、残存器高1.9cmを測る。天井部に回転糸きり痕が残る。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

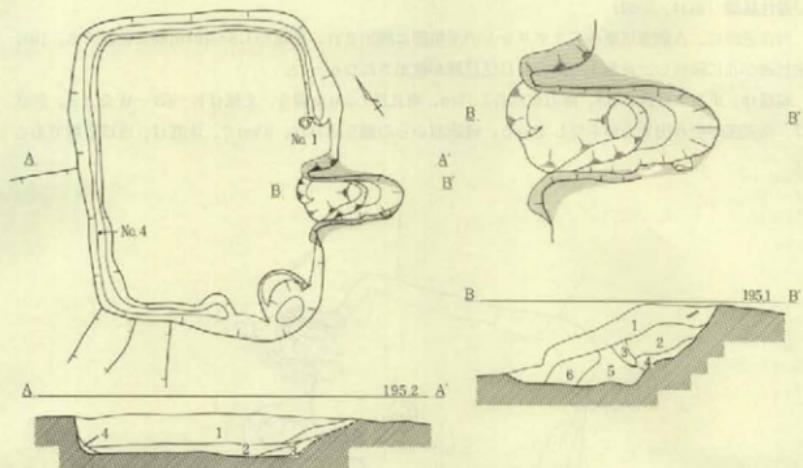
3 壺(須恵器) 体部を大きく欠損する。底径6.5cm、残存器高3.3cmを測る。底部は回転糸きり未調整。体部ロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を多く含む。焼成は還元焰。

4 石製紡錘車 断面台形状を呈し、表面ともシャープな平坦面、側面は不規則なカット面を作り出している。最大口径4.8cm、厚さ2cm、孔径0.9~1.2cm、重量64gを測る。石材は輝石安山岩。

5 壺(土師器) 約1/4が残存する。復元口径12.3cm、器高3cm、復元底径9.7cmを測る。外面底部と体部は荒れが著しい。口縁部~内面横撫で。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

6 壺(土師器) 口縁部と底部の一部を欠損。口径12.9cm、器高3.4cm、底径10.1cmを測る。底部と外面立ち上がり部は手持ちヘラ削り、口縁部~内面横撫で。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

7 壺(土師器) 約1/4が残存する。復元口径10.4cm、器高2.7cm、復元底径7cmを測る。底部は手持ちヘラ削り、口縁部~内面横撫で。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

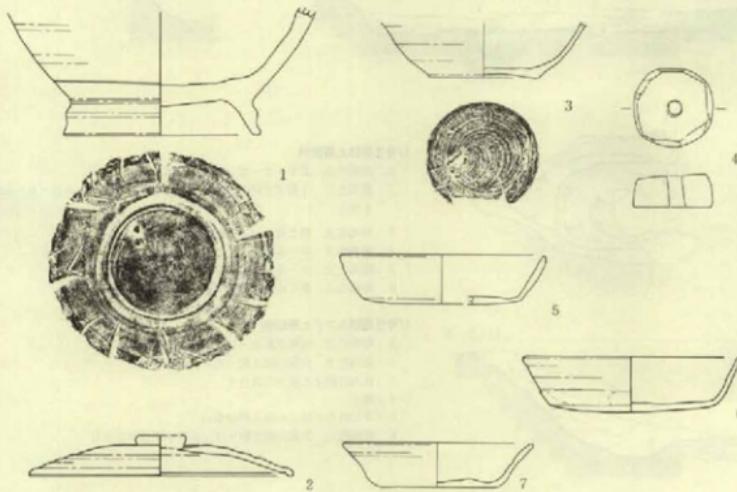


16号住居跡土層説明

- 1 黒褐色土 F P・カーボン粒・ローム粒を含む
- 2 灰褐色粘土 多量の焼土粒を含む
- 3 灰褐色土 カーボン粒・ローム粒を多く含む
- 4 黄褐色土 サラッとしている

16号住居跡カマド土層説明

- 1 黒褐色土 少量のF P・燒土粒・カーボン粒・灰褐色粘土を含む
- 2 灰褐色粘土 多量の燒土粒を含む
- 3 灰褐色土 灰褐色土・燒土粒を含む
- 4 灰褐色粘土 燃土粒・ローム粒を含む
- 5 灰褐色粘土 2層に似る
- 6 灰褐色粘土 5より締まりが弱い

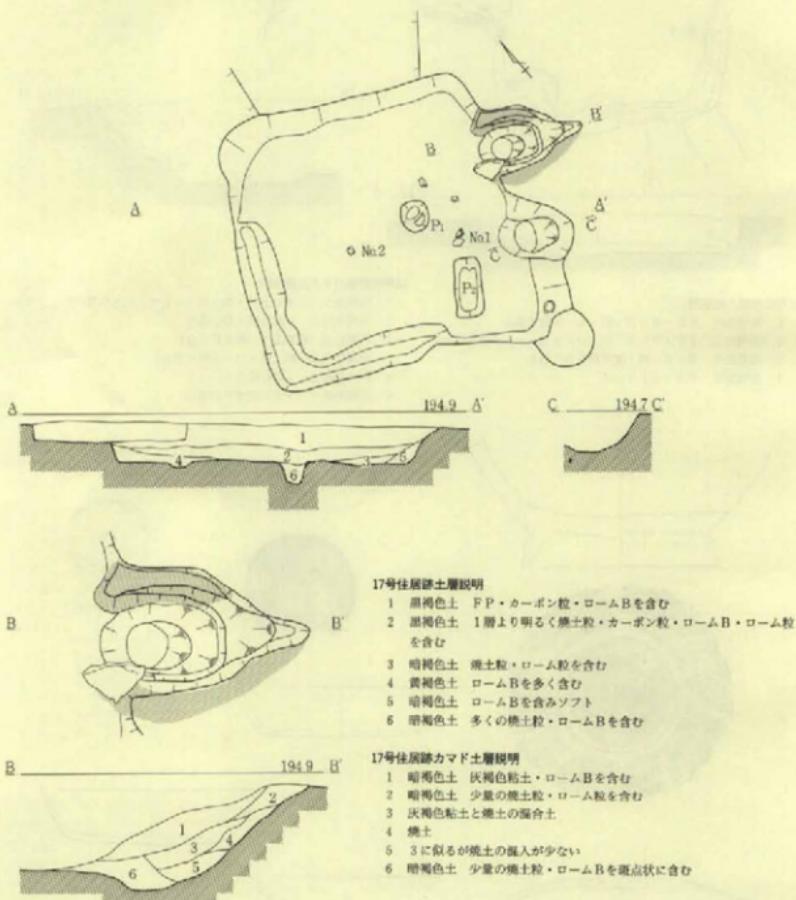


第33図 16号住居跡・出土遺物

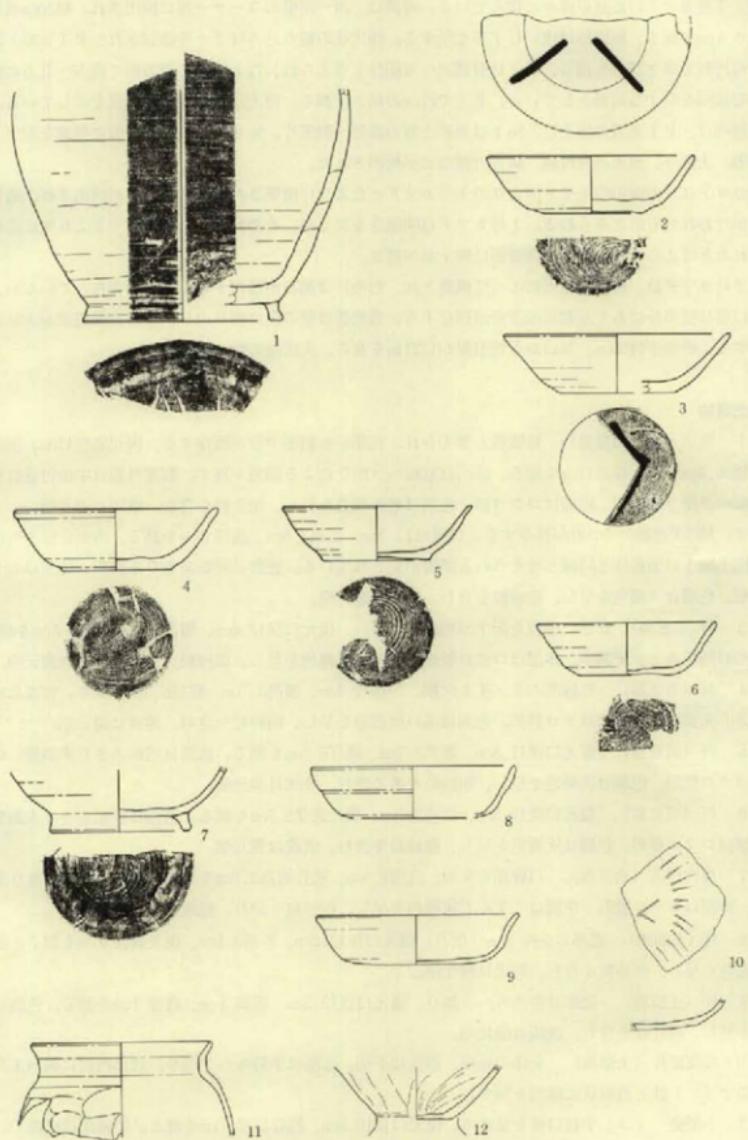
17号住居跡（第34、35図）

当住居跡は、A調査区南西E 2 グリットの平坦部に検出され、標高193.5~194m間に位置する。16号住居跡が北に隣接し、台地上の南方には住居跡が検出されなかった。

規模は、東西中央長3.3m、南方東西長3.75m、南北長3.3mを測り、主軸はN-63°-Wをとる。形状は、南東部が張り出す方形を呈している。確認面からの掘り込みは、33cmで、床面は、ほぼ平坦である。



第34図 17号住居跡



第35図 17号住居跡出土遺物

が、1号カマドの前面が僅かに窪んでいる。周溝は、西～南壁のコーナー部に検出され、幅30cm前後、深さ6cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。柱穴状の掘り込みは2ヵ所確認され、P1は35×38cmの梢円形で深さ28cmを測る。P2は貯蔵穴の可能性も考えられ、72×34cmの長方形で南方～北方に緩やかな傾斜を呈する底面としている。北方で27cmの深さを測る。覆土は自然堆積の状況を示している。

遺物は、P1周辺に出土し、No1は壺形土器の底部～胴部片、No2は須恵坏で内面に墨書を記す。その他、土師坏、須恵高台付碗、脚台付壺などが検出された。

カマドは、東壁の中央やや南よりの1号カマドと北よりに構築された2号カマドが検出され、造り変えが行われたものとみられる。1号カマドは明確さを欠くが、その形状から2号カマドより先に造り出されたと考えられる。僅かに側壁面に焼土面が残る。

2号カマドは、灰褐色粘土によって構築され、右袖には袖石が残存する。支脚は存在していない。焚き口部は壁部分にあり左右に袖部分が残存する。燃焼部は壁の東に張り出し、さらに煙道部が舌状に突出する。燃焼部幅50cm、焚口から煙道部が1.27mを測る。火床面の焼土化は著しい。

出土遺物

1 壺形土器（須恵器） 長頸壺と考えられ、底部から胴部中位が残存する。復元底径12cm、胴部最大径20.4cm、残存器高14cmを測る。底部は回転ヘラ削りによる調整を施す。胴部外面は中位付近にまで回転ヘラ削りが及ぶ。内面はロクロ目。色調は暗灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

2 坏（須恵器） 半分が残存する。口径は12.3cm、器高3.5cm、底径6cmを測る。内面には9号住居跡出土Na1の須恵坏と同様と考えられる墨書が記されている。底部は回転糸引き未調整。体部はロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

3 坏（須恵器） 底部に墨書を記すが判読できない。復元口径13.6cm、器高3.5cm、底径7cmを測る。底部は回転糸引き未調整。体部はロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は還元焰。

4 坏（須恵器） 口縁部の1/4を欠損。口径12.2cm、器高3.7cm、底径6.5cmを測る。底部は回転糸引き未調整。体部はロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

5 坏（須恵器） 復元口径11.3cm、器高3.3cm、底径6.5cmを測る。底部は回転糸引き未調整。体部はロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を多く含む。焼成は還元焰。

6 坏（須恵器） 復元口径10.8cm、器高3.1cm、復元底径5.7cmを測る。底部は回転糸引き未調整。体部はロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は還元焰。

7 高台付碗（須恵器） 口縁部を欠損。底径8.4cm、残存器高3.7cmを測る。底部は回転糸引き未調整。体部はロクロ整形。色調はくすんだ灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

8 坏（土師器） 底部は手持ちヘラ削り。復元口径12.2cm、器高3.1cm、復元底径9cmを測る。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

9 坏（土師器） 底部は手持ちヘラ削り。復元口径12.2cm、器高3cm、底径9cmを測る。色調は褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は酸化焰。

10 坏底部片（土師器） 全体の規模、形状は不明。底部は手持ちヘラ削り。底部内面に鋭い工具の先端で「×」状と放射状に線刻を施す。

11 小型甕 「コ」字状口縁を呈する。復元口径10.8cm、残存器高6cmを測る。口縁部は横撫で、胴部外面ヘラ削り、内面ヘラ撫で。色調は褐色を呈し、微砂粒を多く含む。焼成は酸化焰。

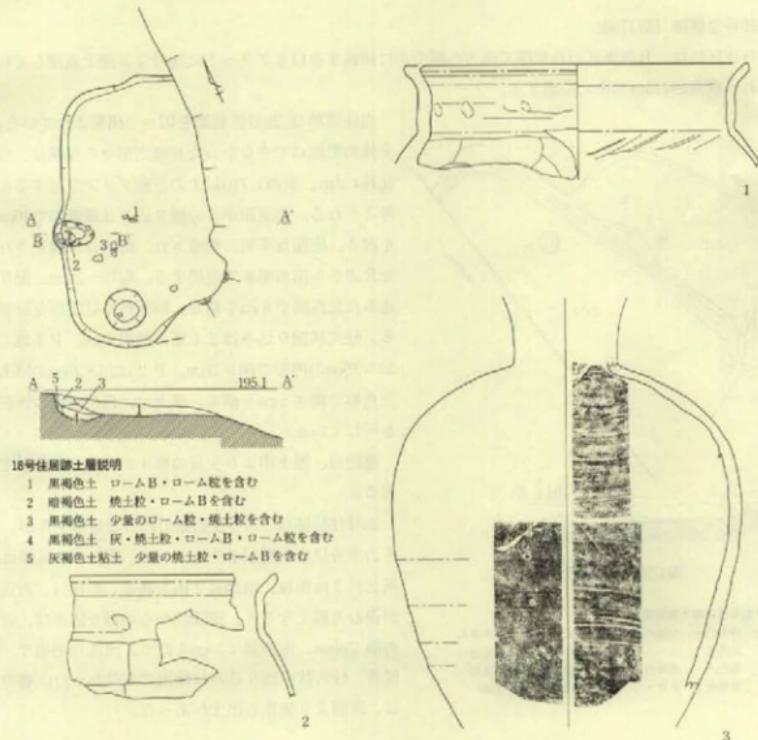
12 窯 台付壺の脚部を欠損する。底部と胴部外面ヘラ削り、内面ヘラ撫で。

18号住居跡（第36図）

当住居跡は、B調査区の谷地部で南東方向へ緩やかに傾斜するN 7°、O 7°グリットにまたがって検出され、ロームとハードに締まった暗褐色土の断層上に構築されている。標高194.5~195m間に位置し、東方に19、20号住居跡、西に柵跡が分布する。

規模は、南北長3.2m、東西長2m以上を測り、主軸はN-67°-Wにとる。形状は、方形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは、残存する北西、南西部で30cmほどを測る。床面はほぼ平坦である。周溝、柱穴状掘り込みは検出できなかった。貯蔵穴は、南西隅の径50cm、深さ10cmの掘り込みが考えられる。覆土は、自然堆積を示している。

遺物は、カマド、その前面に集中して出土している。P 1、2は「コ」の字口縁を呈する壺、P 3は長頸壺の胴部片と考えられる。



第36図 18号住居跡・出土遺物

カマドは、西壁の中央付近に灰褐色粘土によって構築されたと思われるが、袖部、支脚は検出できなかった。焚き口と燃焼部は壁内部に設けられ、煙道部が僅かに西方に突出する。焚き口から煙道部まで50cmを測る。

出土遺物

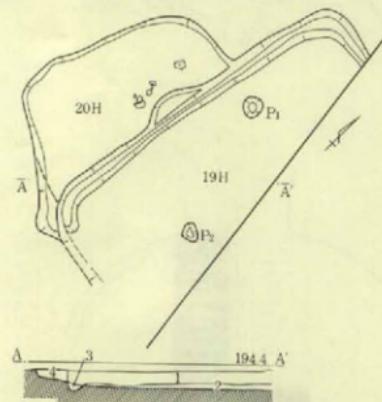
1 壺 「コ」字状口縁を呈する。復元口径21.7cm、残存高7cmを測る。口縁部は横撫で、頸部に指頭圧痕を残す。胴部外面はヘラ削り、内面はヘラ撫で。色調は褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰。

2 壺 「コ」字状口縁を呈する。

3 壺形土器（須恵器） 長頸壺の胴部と考えられる。胴部外面中位までヘラ削りが及ぶ。肩部には自然釉が見られる。内面はロクロ目が明瞭に残る。色調は紫がかかった赤褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成は還元焰。

19、20号住居跡（第37図）

19号住居跡は、B調査区の谷地部で南方へ緩やかに傾斜するO 8グリットに20号住居跡と重複して検出され、標高194.5m前後に位置する。



第37図 19・20号住居跡

19・20号住居跡土層説明

- 1 灰褐色土 少量のF P・ロームB・ローム粒を含む
- 2 黒褐色土 ロームB・ローム粒・カーボン粒を含む
- 3 棕褐色土 黑褐色土・ロームB・ローム粒を含む
- 4 黑褐色土 F P・ローム粒を含む (20号住居跡)

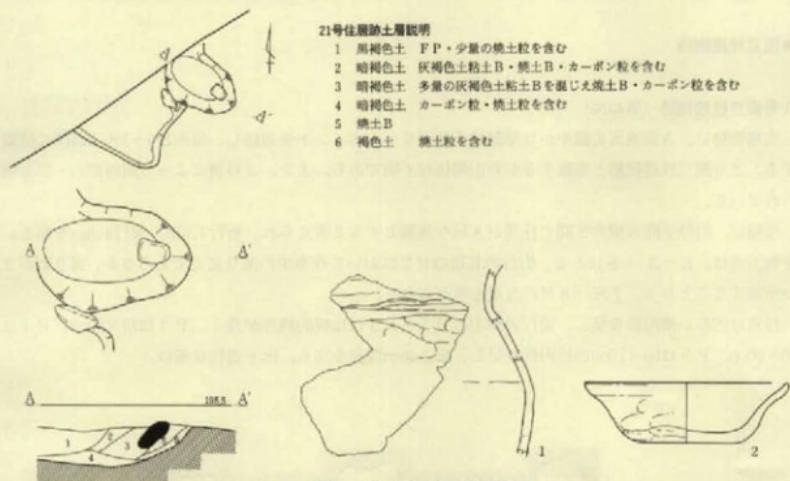
当住居跡は、20号住居跡を切って構築されている。全体の把握はできなかったが検出部分の規模は、南北長4.2m、東西1.7m以上の方形プランを呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは最深部で40cmを測る。床面は平坦に構築され、周溝は、調査された北辺から南西部まで連続する。幅10~20cm、掘り込みは北西隅で8cmを測る。断面形はU字形を呈する。柱穴状掘り込みは2ヵ所に検出され、P 1は、25×25cmの円形で深さ5cm、P 2は25×20cmの隅丸三角形で深さ5cmを測る。覆土は、自然堆積の状況を示している。

遺物は、覆土中より少量の壺片が出土したのみである。

20号住居跡は、19号住居跡の西方で重複するが、その半分以上が形状を失っている。残存する規模は、南北長3m前後、東西長2mを測る。形状は、南辺が重む方形状となろう。確認面からの掘り込みは、北西隅で30cm、南西隅で20cmを測る。床面は平坦で、周溝、柱穴状の掘り込みは検出できなかった。遺物は、床面より壺片の出土があった。

21号住居跡（第38図）

当住居跡は、B調査区P 7、8グリットにまたがって検出され、標高195.5mに位置する。北方を調査区外としているために規模、形状は明確でない。



第38図 21号住居跡・出土遺物

検出された部分は、カマドと南西コーナー部のみで、カマドの主軸は、E-31°-Sを呈している。確認面からの掘り込みは、南西で20cmを測る。周溝、柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。遺物は、カマド内よりNo 1 の甕とNo 2 の环片が出土した。

カマドは、石と灰褐色粘土によって構築されたと考えられ、焚き口は壁内部に設け、燃焼部と煙道部を舌状に張り出させる。袖部の張り出しは無いが右袖部に袖石が残る。内部にも石が存在するが支脚が補強材か明確でない。燃焼部の幅は60cmを測る。

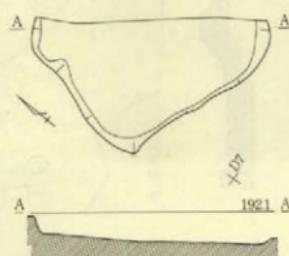
出土遺物

- 1 甕 頸部から胴部上半の破片。胴部に粘土が付着。
- 2 壺（土器部） 復元口径12.2cm、器高3.6cm、底径6.1cmを測る。底部は未調整。外面立ち上がり部にヘラ削り、口縁部横撫で。色調は褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は酸化焰。

22号住居跡（第39図）

当住居跡は、A調査区の南東の東傾斜面が緩やかな平坦部へ移行するD 7グリットに検出され、標高192mに位置する。

規模、形状は明確でなく、住居跡としての根拠に乏しい掘り込みである。確認された規模は、東西長2.5m、南北長2.2m



第39図 22号住居跡

前後を測る方形プランと考えられる。確認面から掘り込みは、西辺中央で30cm、南辺中央で22cmを測る。床面の縁まりは弱く、西方から東方に緩やかに傾斜する。周溝、柱穴状等の掘り込みは検出されなかつた。遺物の出土も土師の細片のみであった。

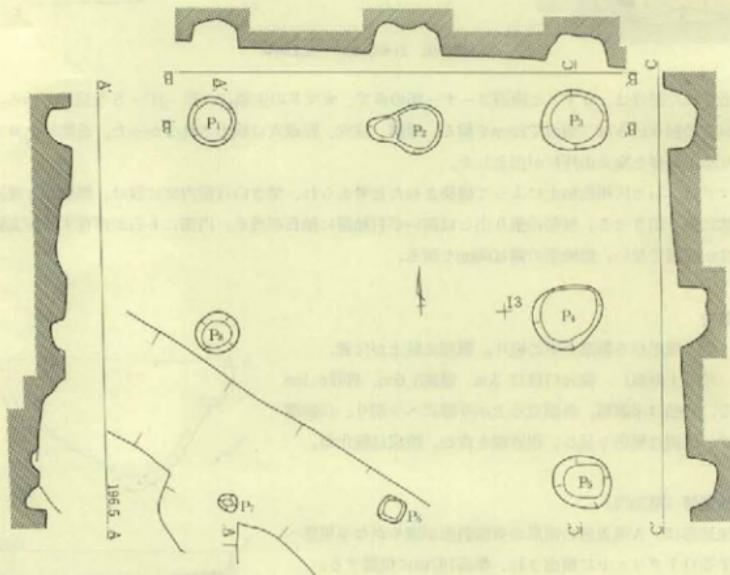
●掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第40図）

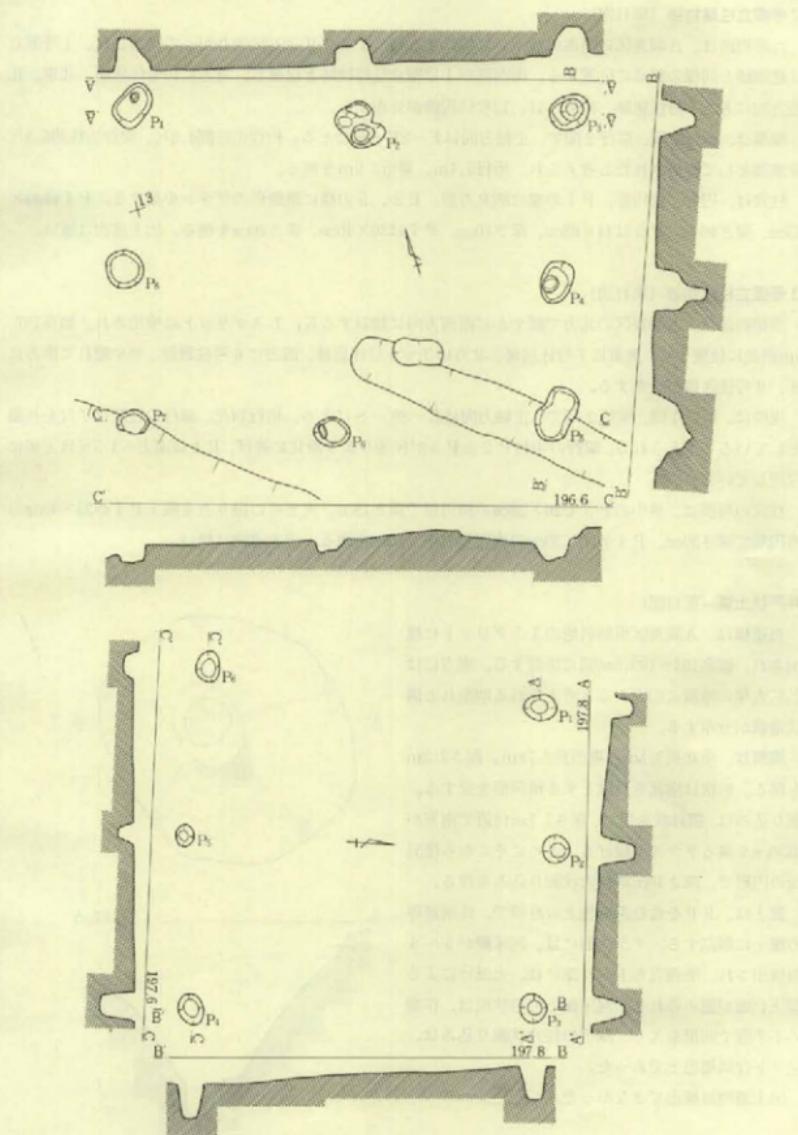
当建物跡は、A調査区の緩やかな傾斜地Ⅰ-3グリットポイントを包括し、標高196～196.5m間に位置する。2号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。また、3号溝によって南西部の一部を切られている。

規模は、桁行2間×梁行2間で柱間が8尺を基調すると考えられ、桁行4.5m、梁行4.5mを測る。主軸方向は、E-3°-Sにとる。桁行の北辺のP2において作事中の掘りえであろうか、掘り方が2つ重複することから、7尺-8尺の尺度も考えられる。

柱穴は円形か楕円形を呈し、梁行の東辺のP3～P5は比較的残存が良く、P3は70×80cm、P4は70×90cm、P5は65×75cmの楕円形を呈し、深さ40cm前後を測る。出土遺物は無い。



第40図 1号掘立柱建物跡



第41図 2・3号橋立柱基礎

2号掘立柱建物跡（第41図）

当建物跡は、A調査区の南西に緩やかに傾斜するH、I 3グリットにまたがって検出され、1号掘立柱建物跡と同様の標高に位置する。南西部が1号掘立柱建物跡と重複し、東方に10号住居跡、北東、北西方向に8、9号住居跡、南方に11、12号住居跡が分布する。

規模は、桁行2間、梁行2間で、主軸方向はE-21°-Sにとる。桁行の柱間8.5尺、梁行の柱間6.5尺を基調として構築されたと考えられ、桁行5.1m、梁行3.9mを測る。

柱穴は、円形、梢円形、P 1の様に隅丸方形、P 2、5の様に遠磨形のプランを呈する。P 1は40×55cm、深さ40cm、P 5は44×68cm、深さ40cm、P 7は30×40cm、深さ20cmを測る。出土遺物は無い。

3号掘立柱建物跡（第41図）

当建物跡は、A調査区の北方で緩やかに南西方向に傾斜するK、L 3グリットに検出され、標高197.5m前後に位置する。南東に7号住居跡、北方に3～5号住居跡、西方に6号住居跡、やや離れて南方に8、9号住居跡が分布する。

規模は、桁行1間、梁行2間で、主軸方向はE-89°-Sにとる。桁行14尺、梁行の柱間は7尺を基調としていると考えられる。梁行の中柱P 2とP 5が柱通りより南北に逃げ、P 1は東方へ1.5尺ほど東に位置している。

柱穴の規模は、最小のP 5で20×28cmの梢円形で深さ18cm、大きめの掘り方を残すP 1が33×40cmの梢円形で深さ30cm、P 4が30×39cmの梢円形で深さ40cmを測る。出土遺物は無い。

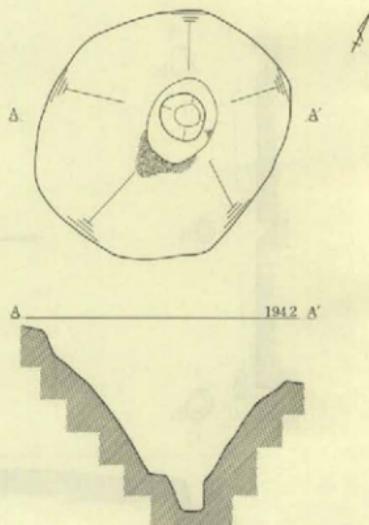
井戸状土壙（第42図）

当遺構は、A調査区東傾斜地のI 7グリットに検出され、標高193～193.5m間に位置する。南方には弘仁九年の地震に起因すると考えられる地割れと溝状遺構が分布する。

規模は、南北長3.1m、東西長2.78m、深さ2.2mを測る。形状は南北を長軸とする梢円形を呈する。掘り込みは、櫛鉢状を呈し、深さ1.7m付近で南方が幅30cmを測るテラスを設ける。さらにそこから径55cmの円形で、深さ40cmの柱穴状掘り込みを作る。

覆土は、FPを含む黒褐色土の堆積で、住居跡等の覆土に類似する。テラス面には、河床疊が5～6個検出され、南側立ち上がり部には、火受けによる焼土化面が認められる。河床疊の埋設状況は、作業の不手際で明瞭を欠く。疊下の柱穴状掘り込みは、ソフトな黒褐色土であった。

出土遺物は検出できなかった。



第42図 井戸状遺構

遺構外出土遺物（第43図）

1 蓋（須恵器） 完形。A調査区の南方C 2グリットで、FPを含む黒褐色土の覆土が堆積する柱穴状掘り込みの底面に逆位で出土。口径16.1cm、器高3.5cm、鉢径2.9cmを測る。外面天井部は回転糸きり未調整。体部はロクロ整形。色調は、暗灰褐色～にぶい赤褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

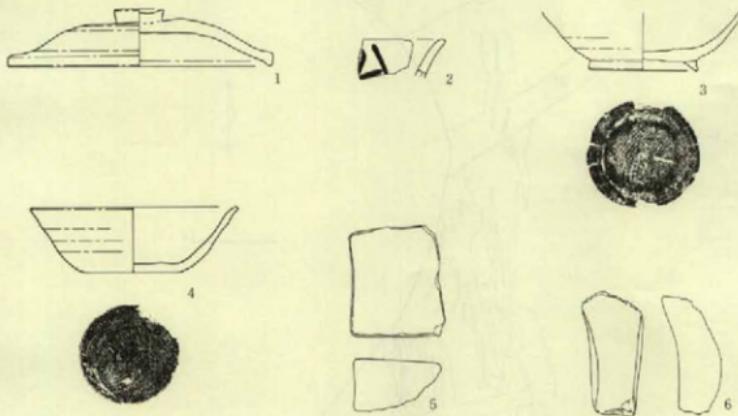
2 墨書き土器

3 高台付碗（須恵器） A調査区D 6グリットの出土。口縁部を欠損。底径6.5cm、残存器高3.5cmを測る。底部は回転糸きり未調整。体部ロクロ整形。色調は灰褐色を呈し、粗砂粒を多く含む。焼成は還元焰。

4 坯（須恵器） 3と同様のグリット出土。復元口径12.3cm、器高3.9cm、底径5.7cmを測る。底部は回転糸きり未調整。体部ロクロ整形。色調はやや黄色味を帯びる灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。

5 砧石 A調査区のH 4グリットの出土。石材は凝灰角礫岩。現存長6.7cm、幅5.7cm、厚さ3.2cm、重量167gを測る。

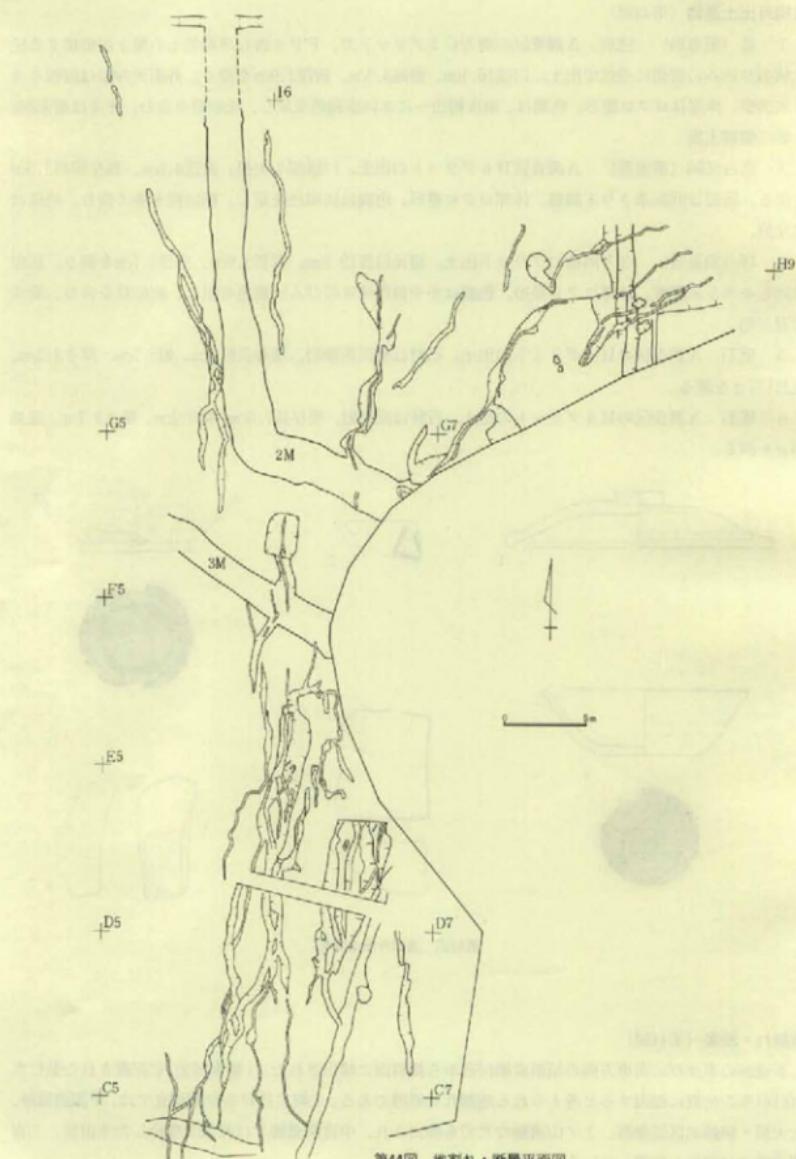
6 砧石 A調査区のH 5グリットの出土。石材は流紋岩。現存長7.5cm、幅3.2cm、厚さ3.7cm、重量95gを測る。



第43図 遺構外出土遺物

地割れ・断層（第44図）

本遺跡の東並びに南東方向の傾斜変換付近から傾斜面に検出された。「頬聚国史」に記載された弘仁九年(818)年の地震に起因すると考えられる地割れと断層である。当町に於ける発掘調査では、甲諏訪遺跡、上大屋・樋越地区遺跡群、上ノ山遺跡などでも検出され、中宮関遺跡では泥流で埋没した水田址、下宮関遺跡では噴砂を確認している。



第44図 地割れ・断層平面図

第4節 中近世

日光道東古墓（第45、46図）

A調査区の南端A3グリットに検出され、台地先端部の標高192～192.5mに位置する。南方は4mほどの比高差で削平された畠地、東方は急傾斜で弧状に抉れ谷低地に続く。

戦前に骨蔵器と考えられる壺形土器が出土した（当町文化財調査員 北爪隆雄氏談）と聞くが、詳細は不明である。

検出された遺構は、土葬墓と火葬墓である。敷石を伴う1号墓（火葬墓）、五輪塔を基標とする2号墓（土葬墓）、軽石をくりぬいて骨蔵器とする3号墓（拾骨され、骨蔵器に収納された火葬墓）、縁石を伴う4号墓（不明）、上部構造と下部構造が不明な焼骨のブロック（1～5号集骨）等である。墓域に伴ったと考えられる出土品は古鏡、板碑片のみである。

1号墓

墓域群の最も東に検出された。敷石を伴う墓域と考えられ、その広がりは南北長3.4m、東西（南方の集石部）1.6mを測り、南西方向に礫が散在する。その大半は、偏平な河床礫を用い、瓦器質の捏鉢（第47図1）を骨蔵器として使用したと推察される。規模、形状は不明であり、掘り込みも確認できず副葬品もなかった。おそらく、焼骨を拾骨して捏鉢を骨蔵器に使用したと考えられる。敷石は骨蔵器を中心として方形区画を施したのであろう。上部構造は不明である。

2号墓

1号墓の西の傾斜変換点に位置し、基標として使用された五輪塔の地輪部が10°東傾して検出された。地輪下には安定を図る為に河床礫を敷いている。墓坑は北東部がやや突出する梢円形を呈し、主軸をN-20°-Eにとる。規模は、長軸長2.06m、短軸長1.2m、最深部で1.28mを測る。基標は墓坑の中央やや南北よりに設けられている。地輪（第47図2）は、安山岩で30×26cm、厚さ17cmを測る。

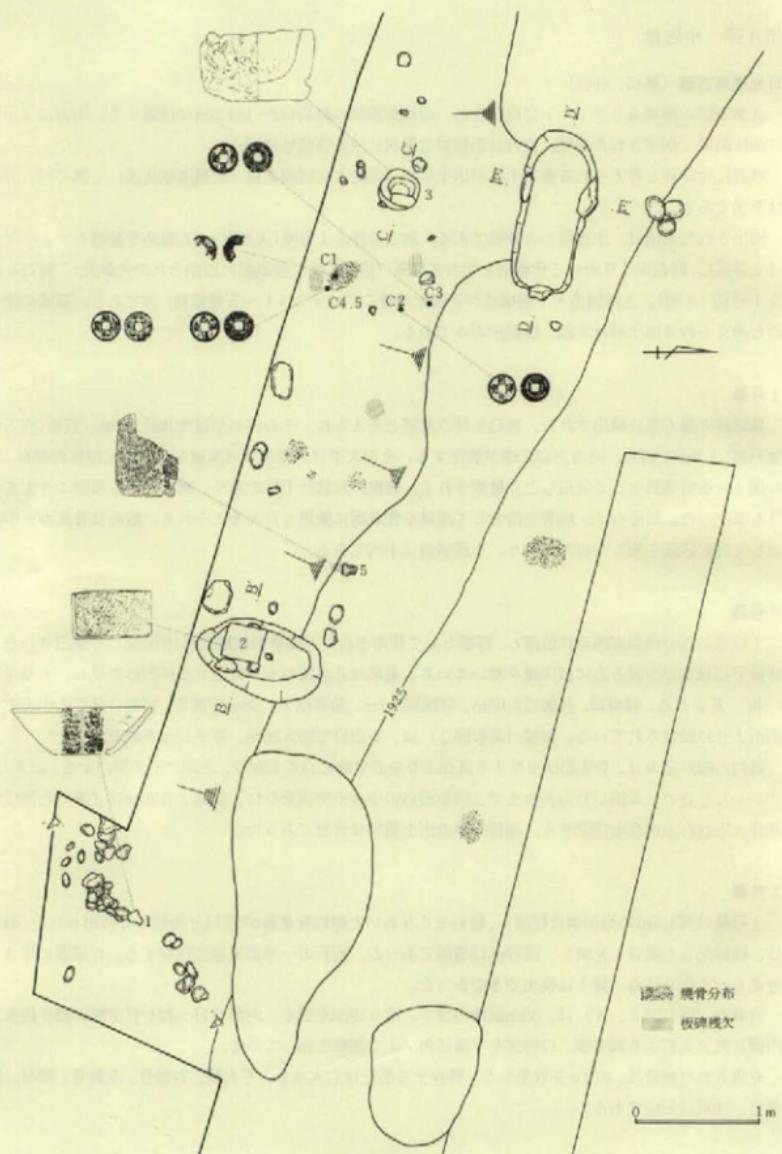
墓坑の掘り込みは、やや起伏を呈する底面より垂直気味に立ち上がり、上部でやや開口する。埋土は、サラッとしたローム混じりの褐色土で、西壁沿いの中央やや南寄りに、底面より30cmほど浮いた部位に頭骨と思われる存在を確認する。副葬品等の出土遺物は皆無であった。

3号墓

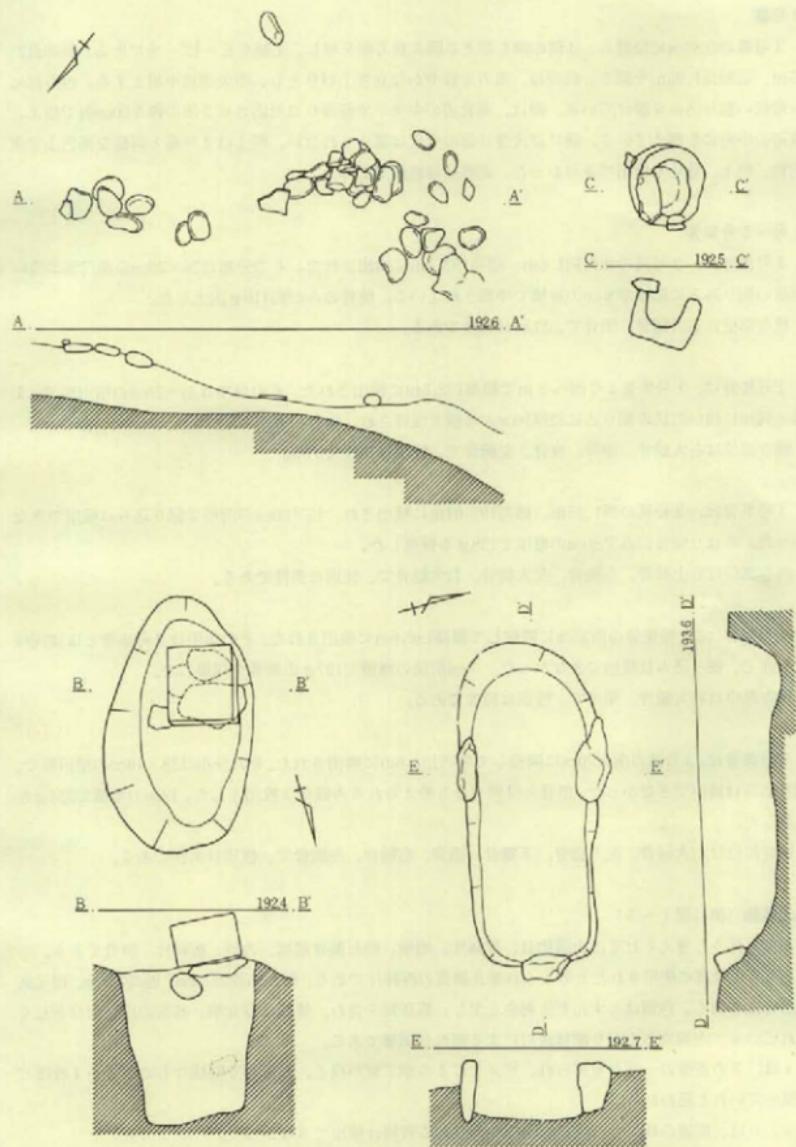
2号墓の西3.5mの傾斜地に位置し、軽石をくりぬいた横形骨蔵器が15°ほど西傾して検出された。器内は、破碎化した焼骨を充填し、副葬品は皆無であった。蓋石の一部が東縁に残存する。骨蔵器に伴うと考えられる掘り込み、封土は検出できなかった。

骨蔵器（第47図3、4）は、30cm前後の径で、高さ19cmを測る。内部は14cm程をU字形に掘り抜き、内面に丸ノミによる調整痕、口唇部を平線に角ノミで調整を施している。

充填された焼骨は、878gを収集した。残存する部位は右大腿骨、左大腿、右腕骨、左腕骨、頭骨、椎骨で、性別は男性である。



第45図 中世古墓全體図



第46図 中世古墓平面図

4号墓

3号墓の北80cmに位置し、3個の礫を据える隅丸長方形を呈し、主軸をE—13°—Sにとる。長軸長2.25m、短軸長1.05mを測る。底面は、東方に緩やかな立ち上がりとし、中央部は平坦とする。西方部に一段低い掘り込みを設けている。礫は、南北辺の中央やや西寄りに対応させ2個の礫を90cm幅で据え、東辺の中央にも据えている。礫には火受け等の変化は認められない。埋土は2号墓と同様な褐色土で炭化物、焼土、骨片も検出できなかった。副葬品は皆無であった。

1号～5号集骨

1号集骨は、2号墓の北東約1.6m、標高192.7mに検出された。その分布は26×20cmの楕円形で浅い皿状の掘り込みに最厚で6cmの堆積で埋葬されている。焼骨のみが約110g出土した。

残存部位は右大腿骨、頭骨で、性別は男性である。

2号集骨は、1号集骨より西へ2mで標高192.6mに検出された。その分布は35×28cmの楕円形で、1号と同様に浅い皿状の掘り込みに最厚10cmの堆積で埋葬され、焼骨のみが375g出土した。

残存部位は右大腿骨、頭骨、椎骨、左腕骨で、性別は男性である。

3号集骨は、2号墓の西1.25m、標高192.64mに検出され、15×20cmの円形で掘り込みは検出できなかった。やはり焼骨のみで9cmの堆積で138gを採集した。

残存部位は右上腕骨、左腕骨、左大腿骨、右大腿骨で、性別は男性である。

4号集骨は、3号集骨の南35cmに隣接して標高192.6mに検出された。その集中は3号集骨とほぼ同様の分布で、掘り込みは検出できなかった。7cm前後の堆積で107gの焼骨を採集した。

残存部位は右大腿骨、頭骨で、性別は男性である。

5号集骨は、3号墓の南東50cmに隣接して標高192.6mに検出された。その分布は28×18cmの楕円形で、掘り込みは検出できなかった。集骨と供判すると考えられる古銭が3枚出土した。12cmの堆積で334gを収集した。

残存部位は右大腿骨、左大腿骨、下頸骨、頭骨、右腕骨、左腕骨で、性別は男性である。

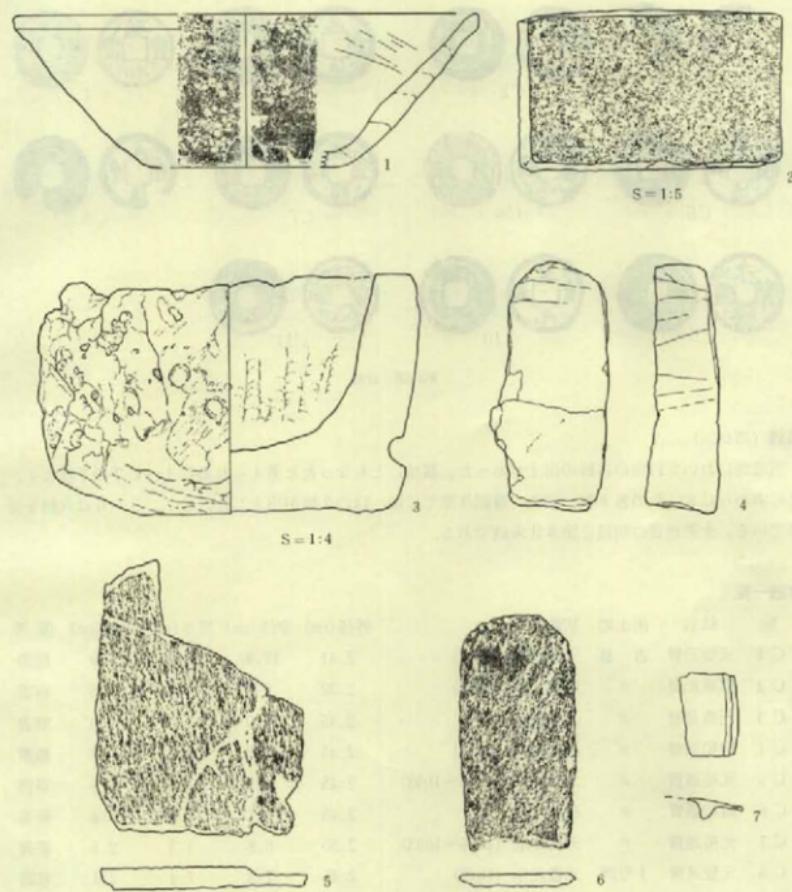
出土遺物（第47図1～5）

墓域に伴うと考えられる出土遺物は、捏鉢片、地輪、蛭石製骨蔵器、古銭、板碑片、焼骨である。

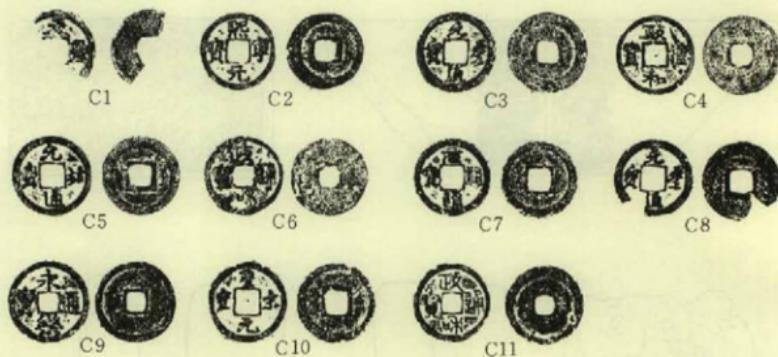
1は、1号墓に使用されたと考えられる瓦器質の捏鉢片である。復元口径27.3cm、器高7.1cm、復元底径11.5cmを測る。色調はくすんだ灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。焼成は還元焰。器面の内外面は著しく荒れている。内面立ち上がり部は使用による擦れが顕著である。

4は、3の蓋部の一部と考えられ、平ノミによる加工痕が残る。おそらく同様なものを3～4枚ほどで覆っていたと思われる。

5、6は、板碑の残欠で形状、規模等を割り知る資料は検出できなかった。



第47図 古墓出土遺物



第48図 古銭

古銭（第48図）

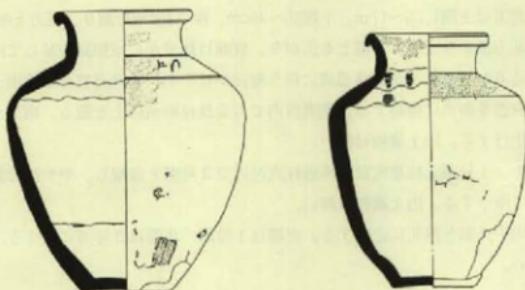
当遺跡において11枚の古銭の出土があった。墓域にともなったと考えられるC 1～C 7の7枚と1、2号溝からC 8、9の各1枚、プラン確認作業でC 10、11の2枚が出土した。C 1、3～6は火熱を受けている。永楽通寶の明錢を除き北宋錢である。

古銭一覧

No.	銭名	出土地	初鑄造年	外径(cm)	穿径(cm)	厚さ(cm)	重量(cm)	備考
C 1	天聖元寶	古墓	天聖元年(1023)	2.41	(7.9)	(0.9)	0.9	楷書
C 2	熙寧元寶	ノ	熙寧元年(1068)	2.32	6.6	1.0	2.6	楷書
C 3	元豐通寶	ノ	元豐元年(1078)	2.45	6.9	1.0	2.9	草書
C 4	政和通寶	ノ	政和元年(1111)	2.45	6.7	1.4	2.7	楷書
C 5	元祐通寶	ノ	元祐年間(1086～1093)	2.45	6.8	1.2	3.9	草書
C 6	政和通寶	ノ	政和元年	2.45	6.1	1.4	3.4	篆書
C 7	元祐通寶	ノ	元祐年間(1086～1093)	2.35	6.8	1.3	2.5	篆書
C 8	元豐通寶	1号溝	元豐元年(1078)	2.45	7.3	1.4	2.1	草書
C 9	永樂通寶	2号溝	永樂元年(1408)	2.50	5.9	1.2	3.1	楷書
C 10	聖宋元寶	E 4グ	建中靖国元年(1101)	2.45	7.4	1.2	2.9	草書
C 11	政和通寶	G 2グ	政和元年	2.41	6.2	1.1	2.7	篆書

小結

当町に於ける中世古墓の検出は、茂木古墓に統いて2例目である。茂木古墓は、大字茂木字上ノ山の大胡町第5号墳の南面で台地の裾部に検出されている。昭和32年4月に群馬大学史学研究室により発掘調査が行われ、台地の裾部をL字形にカットし、切石により長方形の区画を作り出している。区画内は敷石を配し、板碑を墓標（供養塔？）とし骨蔵器と供伴している。ほかに骨壺なしに埋葬されている状



第49図 茂木古墓

況も見られる。調査前の土地所有者が掘り出した板碑と検出された骨蔵器（常滑焼）より鎌倉時代末期の墓地としている。（注1）

日光道東遺跡で検出された地区に於ける寺院址、墓地関連を連想させる字名等は見られないが、口承では寺院が存在したと言われている。日光道東古墓は茂木古墓と同様に埋葬所としての性格が強い。明確な墓域区画は不明瞭であり、全体像は把握できないが火葬墓と土葬墓が検出された。墓標は五輪塔と板碑が混在して使用されたと考えられる。2号墓の土葬を除き、採集された骨は焼骨で拾骨により骨蔵器かほかの収納器により埋葬されたと考えるのが妥当であろう。では火葬施設はどこに存在するのであるか？当遺跡では火葬跡として認められる遺構の検出がなかったが、字名として南西方向約800mに焼場下の地名が存在することを記しておく。

墓地の年代観は、五輪塔、板碑、骨蔵器、副葬品により推定する根拠となる。しかし、墓の上部構造をなしたと考えられる石造物の地輪、板碑の残欠からは根拠に乏しい。骨蔵器として蓋付石櫃と捏鉢が出土しているが、前者は赤城南麓に多く検出されている安山岩の石櫃（注2）の系譜を踏襲するものか不明であり、捏鉢は富田遺跡群（注3）などに類例が見られる。副葬品としては古銭のみであった。その鋳造年代も11、12世紀の北宋錢と15世紀代の明錢のみである。明錢である「永樂通寶」を指標として考えるとその流通する15～16世紀代が構築年代と推定される。

注1 大胡町誌 第二章 第十二節 茂木古墓

注2 新版仏教考古学講座 第7巻 墳墓 北関東 川原由典

注3 富田遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報 1980 前橋文化財研究会

溝状遺構（第50・51図）

1号溝 本遺跡の南方、ほぼ台地に直交するように東西に走行する。確認長は50mほどで、C5グリットポイント付近で途切れているが従来はつながっていたと考えられる。西方での規模は上端2.2m、下端70cm、深さ40cmを測る。出土遺物は元豊通寶1枚が出土。

2号溝 本遺跡の東、傾斜変換付近には南北に直進し、F5グリットの北東部で20°前後の角度で東方に折れ、傾斜地方向に走行する。南北走行の長さは50m以上を測り、G5、K5グリットで段差を有する。K5グリットの北方は上端1.55~17m、下端30~40cm、深さ40cmを測り、南方と60cmほどの段差を生じる。中央部は北方部より上端、下端とも広がり、底面は緩やかに南傾斜を呈して南走する。底面と壁面に柱状の掘り込みが見られるが溝状遺構に伴う施設かは不明。永楽通寶が1枚出土。

3号溝 本遺跡の中央部を斜めに横断する。調査区内での全長は85m以上を測る。南東から北西方向に徐々に上端を狭めて走行する。出土遺物は無い。

4号溝 本遺跡の西方、1号掘立柱建物跡の南西柱穴付近で3号溝と重複し、やや西に振りながら13号住居跡の上面を切って南走する。出土遺物は無い。

5号溝 本遺跡の台地中央部を南北に走行する。南端は1号溝、北端は3号溝に接する。全長約40mを測る。出土遺物は無い。

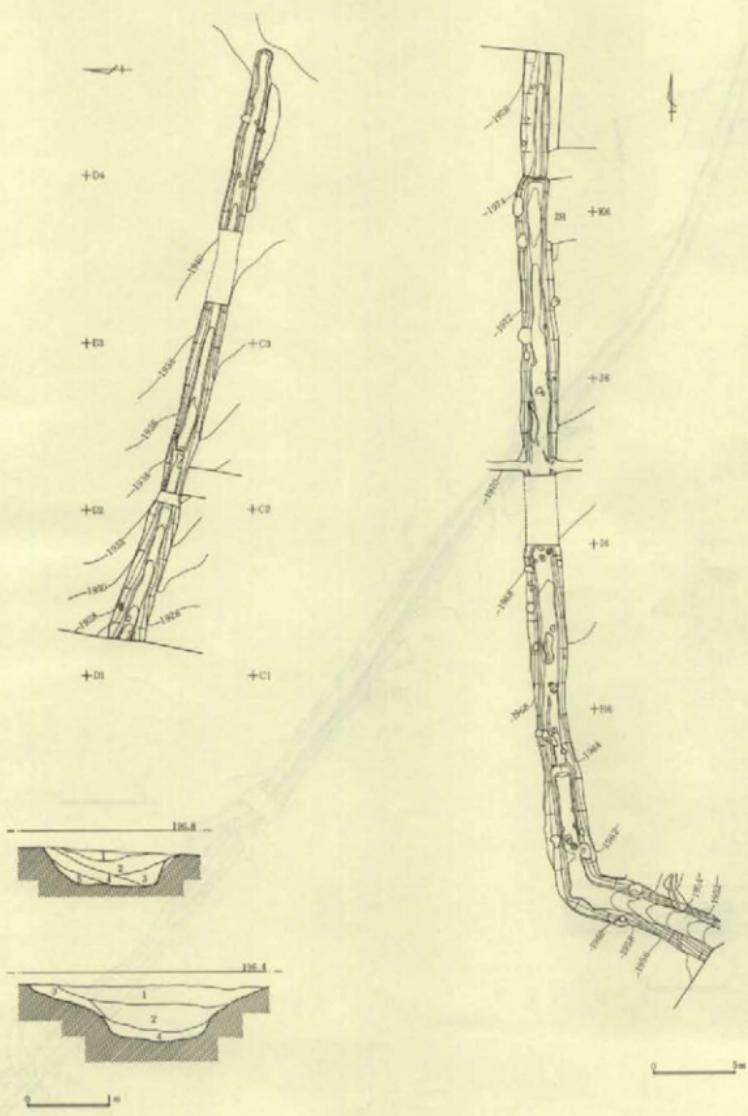
第3章 調査の成果と今後の課題

本調査で旧石器時代～中世に至る遺構・遺物の検出があった。旧石器時代では、当町では初見である網石核が出土しているが層序との関係は不明であり、ユニットも検出できなかった。

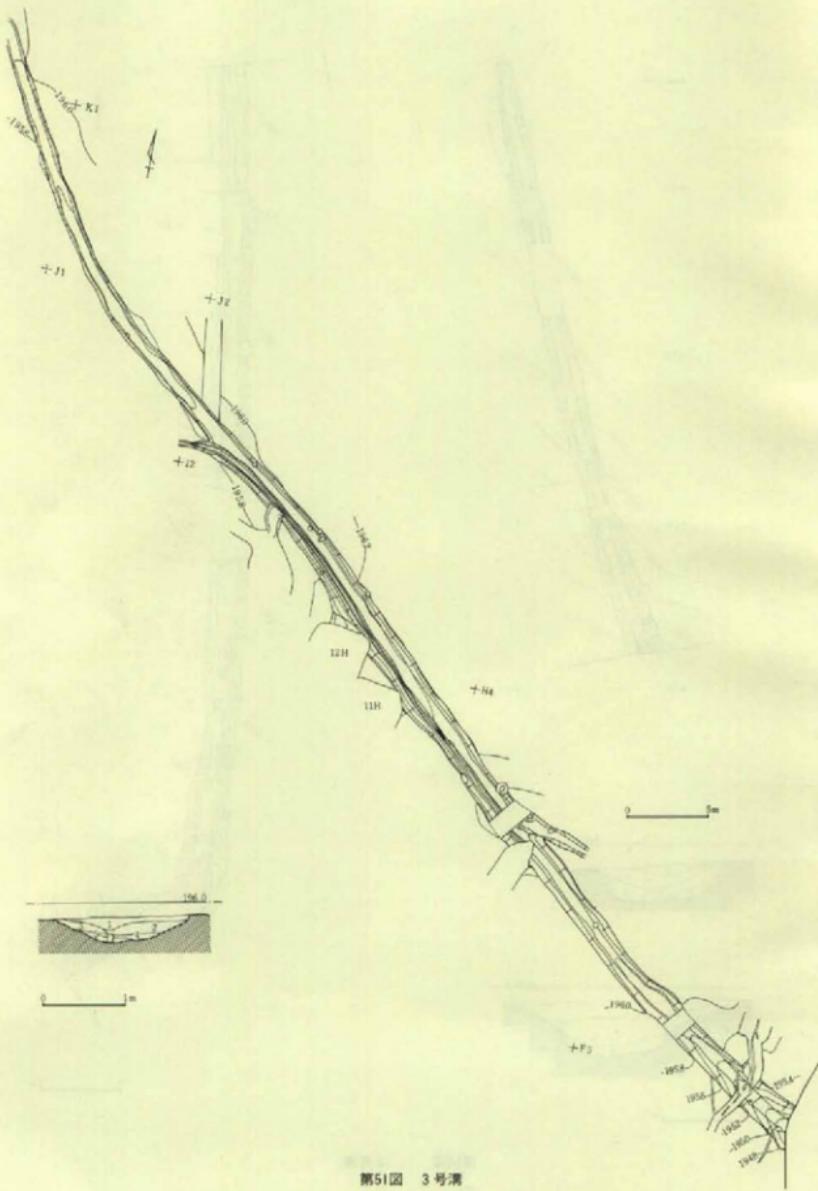
縄文時代では、土壙と落し穴式遺構を検出した。落し穴遺構は形状から2つのタイプを検出し、長楕円はさら施設の有無で細分される。土器片は早期～中期に至るが、前期黒浜式期の土器片が土壙に伴い出土したのみであった。

平安時代の遺構は、22軒の堅穴住居跡、3軒の掘立柱建物跡と同時代と考えられる井戸状遺構を検出した。堅穴住居跡と掘立柱建物跡の分布は、大半が台地平坦部に検出された。北東の低地部で検出された18号住居跡は弘仁9(818)年の地震災害に起因する断層上に構築されたと考えられる。堅穴住居跡と掘立柱建物跡は、両者が共存していたとすれば3号掘立柱建物跡を堅穴住居跡が環状に取り巻く状況から群で集落を構成したと考えられる。出土した所謂「コ」の字状口縁を特徴とする土師器甕から9世紀後半～10世紀前半を全盛期とする新開拓集落と推察する。井戸状遺構は、赤城南麓でも検出されているが性格不明の遺構である。

古墓は、全容を把握できないが火葬墓と土葬墓が検出され、年代観を推察する資料に乏しいが15～16世紀を推定する。



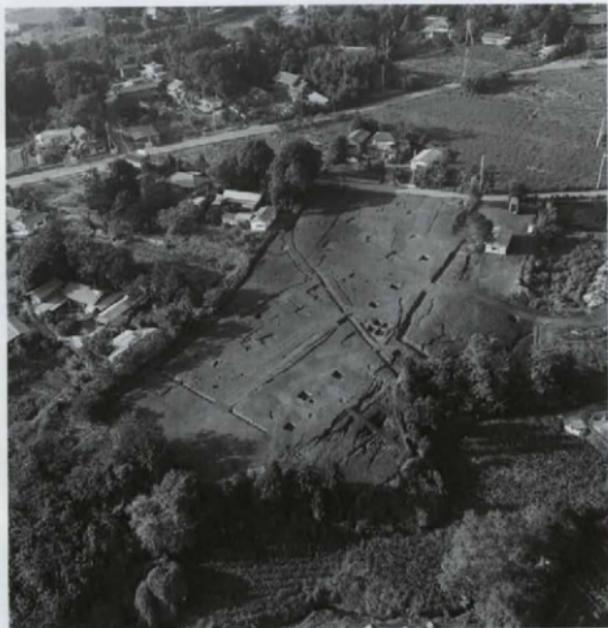
第50図 1、2号溝



第51図 3号溝

写
真
図
版

P L I



遺跡全景（南東より）



1 2号住居跡(東より)



2 2号住居跡(南より)



3 2号住居跡遺物出土状況



4 3号住居跡(南より)



1 3号住居跡カマドセクション(南西より)



2 4号住居跡(北より)



3 4号住居跡セクション(南西より)



1 4号住居跡カマドセクション(西より)



2 4号住居跡遺物出土状況



3 5号住居跡(北西より)



I 5号住居跡カマドセクション(南西より)



2 5号住居跡カマド(西より)



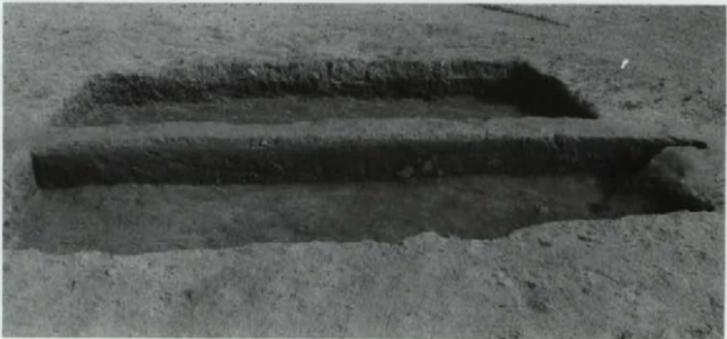
3 6号住居跡(北西より)



1 6号住居跡セクション(南より)



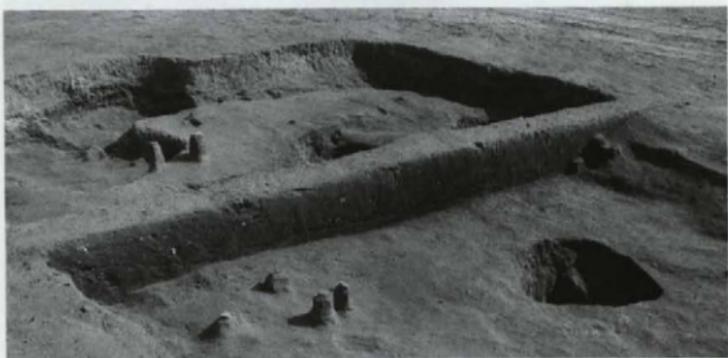
2 7号住居跡(北西より)



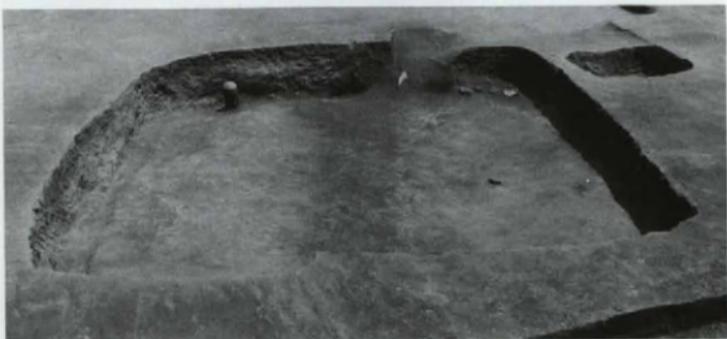
3 7号住居跡セクション(南西より)



1 8号住居跡(北西より)



2 8号住居跡セクション(南西より)



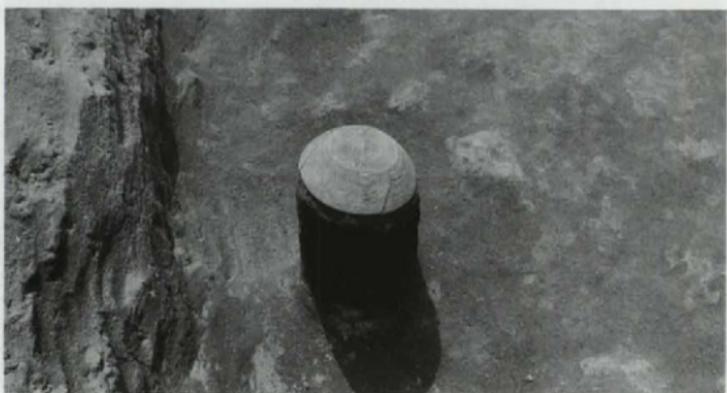
3 9号住居跡(西より)



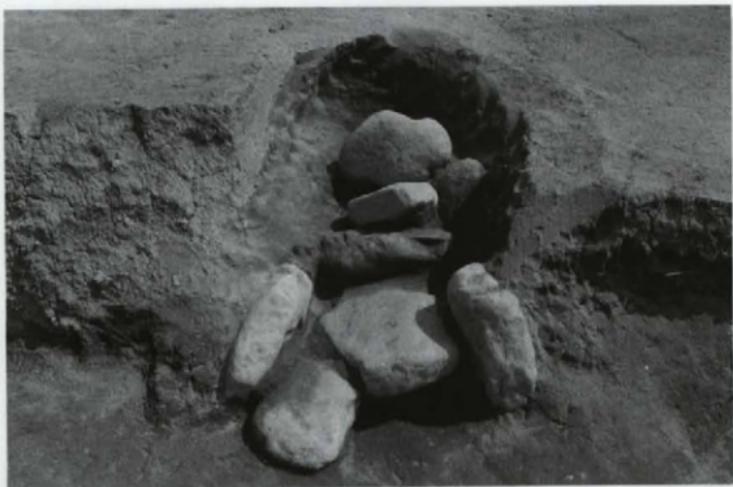
1 9号住居跡セクション(南より)



2 9号住居跡遺物出土状況



3 9号住居跡遺物出土状況



1 9号住居跡カマド(西より)



2 11、12号住居跡(西より)



3 11、12号住居跡セクション(南西より)



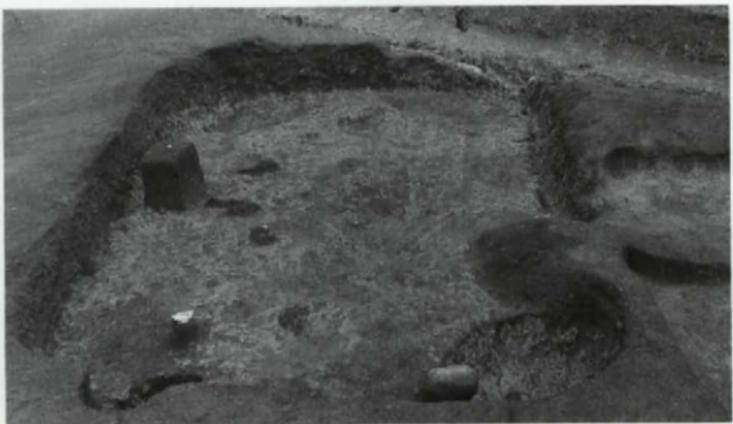
1 11号住居跡(南西より)



2 11号住居跡カマドセクション(南西より)



3 11号住居跡カマド(西より)



1 12号住居跡(南西より)



2 13号住居跡(北西より)



3 13号住居跡カマドセクション(南西より)



1 13号住居跡カマド(北西より)



2 13号住居跡遺物出土状況



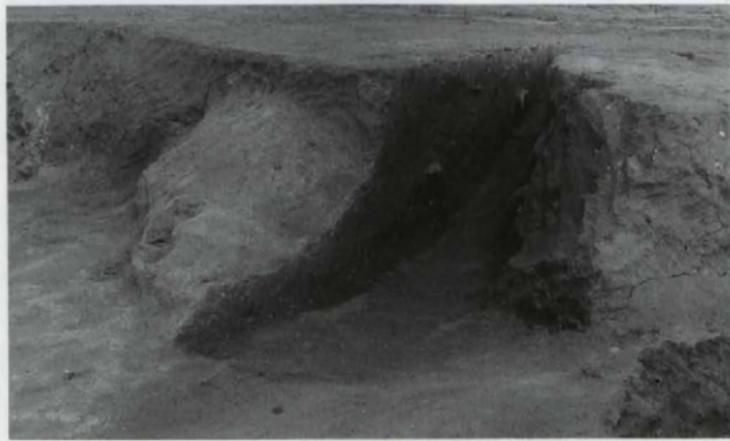
3 14号住居跡(北西より)



1 14号住居跡セクション(北西より)



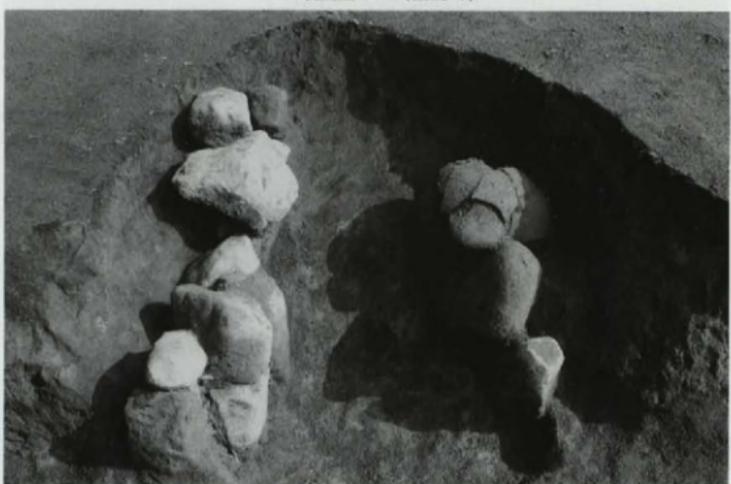
2 14号住居跡遺物出土状況(北西より)



3 14号住居跡カマドセクション(南西より)



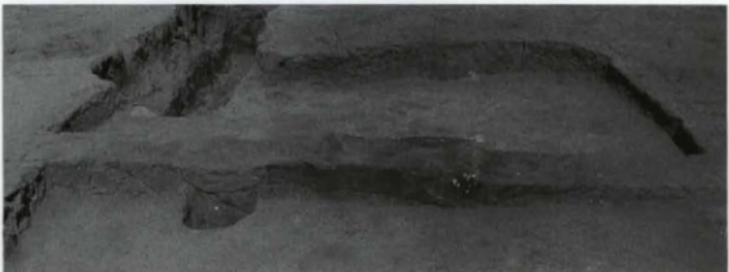
1 14号住居跡カマド(北西より)



2 14号住居跡カマド(北西より)



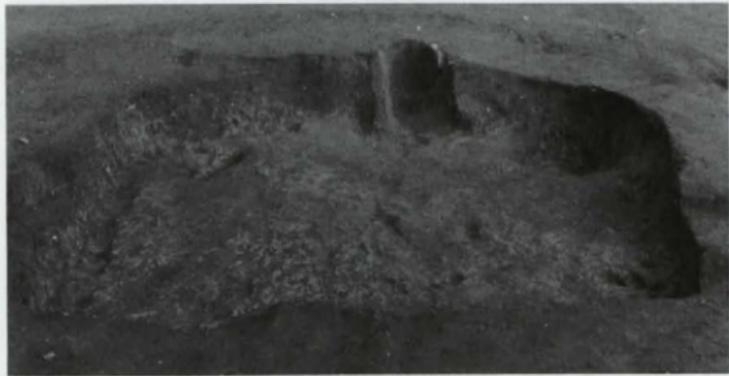
3 14号住居跡遺物出土状況



1 15号住居跡セクション(南西より)



2 15号住居跡カマド(北西より)



3 16号住居跡(北西より)



1 16号住居跡セクション(南西より)



2 17号住居跡(北西より)



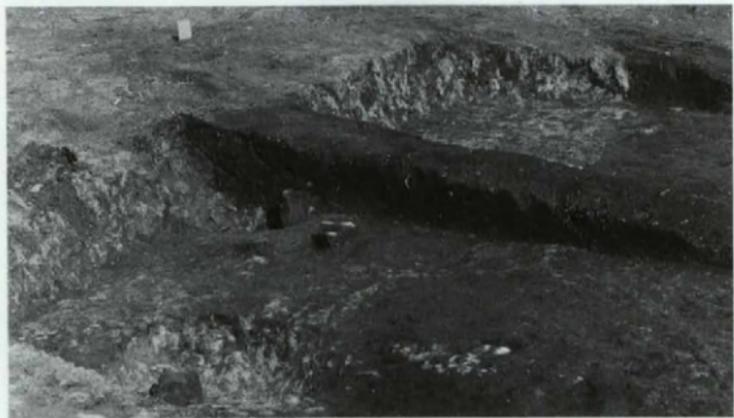
3 17号住居跡(北西より)



1 17号住居跡セクション



2 18号住居跡(南東より)



3 18号住居跡セクション(南より)



1 19、20号住居跡(南西より)



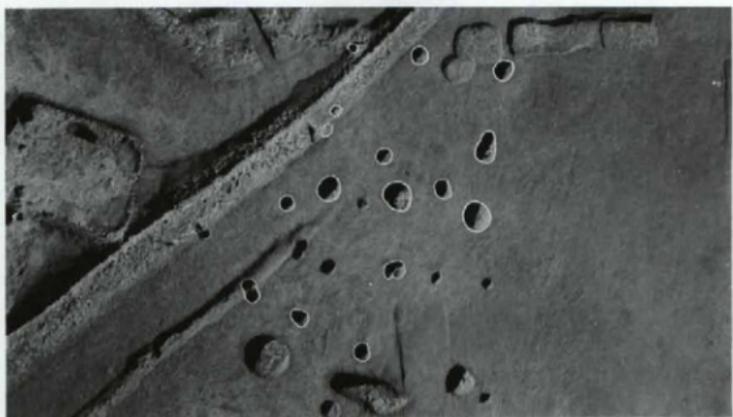
2 19、20号住居跡セクション(南西より)



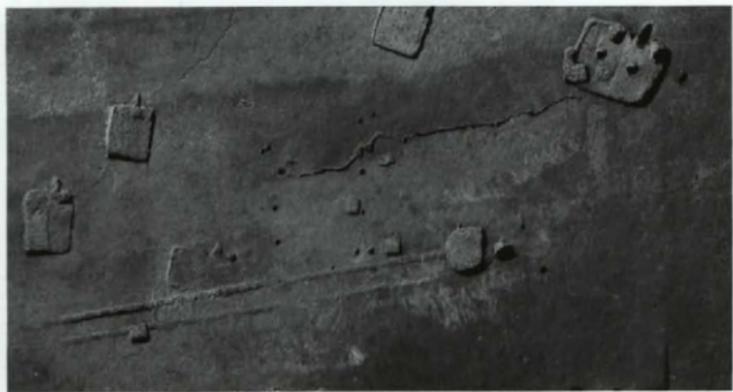
3 21号住居跡(南西より)



1 21号住居跡(南より)



2 1、2号掘立柱建物跡



3 3号掘立柱建物跡

日光道東遺跡 団体賞日光道東地区土地改良総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成6年3月30日発行

編 集 群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発 行 群馬県勢多郡大胡町教育委員会

〒371-02 群馬県勢多郡大胡町河原浜483

電話 0272(83)7141

印刷製本 朝日印刷工業株式会社